

絵合

- 1 さしぐしのはこの心ばに (聖書12・171)
 ① 挿櫛は 十まり七つ ありしかど たけくの椽の 朝に取
 り 夜ざり取り 取りしかば 挿櫛もなしや ききむだち
 や (催馬楽、挿櫛、二七) 「最」さしぐしはたらざりなつ
 ありしかどよざりけりとりたけのくのこうちのあしたに
 とりようざりけりとりとりしかばさしぐしもなしやきき
 んだちや
- ② 浅からぬ契りむすべる心ば、手向のかみぞしるべかりける
 (拾遺集卷六、雑上、四六) 物へまかりける人のもとに幣を
 結び袋に入れて遣はすとて 能宣 (幣) (異) (最) (河) (休)
 (絶)、(孟)あさからず、(峴)
- 2 わかれ路にそへしをぐしをかごとにてはるけき中と神やいさ
 めし (聖書13・172)
 恋しくは来ても見よかし早振神のいさむる道ならなくに
 (伊勢物語、二四・和泉式部日記、五二・続千載集卷十三、恋
 三、四三、返し 業平) (河)きてもとへかし (真本よかし)、
 (休) (孟) (峴)
- 3 なつかしうあはれなる御心ばへをなど思みだれ給てとばかり
 うちながめ給へり (聖書6・172)
 ながしとてあけずやはあらむ秋のよはまてかしまきのとば
 かりをだに (後拾遺集卷十六、雑三、五六、門おそくあくとして
- 4 帰りにける人のもとにつかはしける 和泉式部 (拾) (余)
 秋の夜は
 かなしき (聖書2・173)
 逢ひ見しをうれしき事と思ひしはかへりて後のなげきなり
 けり (後拾遺集卷十四、恋四、七三、年頃あはぬ人にあひて後
 につかはしける 道命法師) (拾) (余)
- 5 しめのうちむかしにあらぬこゝちして神よの事もいまだ恋
 しき (聖書6・182)
 しめのうちに花の匂ひを鈴虫の音にのみやは聞きふるすべ
 き (続千載集卷四、秋上、三三、夕ぐれがたにちひさきこに
 鈴虫を入れて紫の葉えふに包みて秋の花にさしてさるべき
 所の名のりをせさせて齋院にさし置かすとてその包紙に書
 き付けたりける 読人しらす) (拾) (余)

松 風

1 このわか君の御おもてふせに〔吾九一・191〕

かざせども老も隠れぬこの春ぞ花のおもてはふせつべらなる

(後撰集卷三、春下、六、延喜の御時殿上のをのことも
のなかにめしあげられておのゝかざしさしける序に 凡

河内躬恒)〔河〕花のおもても、〔孟〕、〔岷〕花のおもても

(不及此歌)、〔湖〕ぬさもかくれも此春は花のおもても

2 大かく寺のみなみにあたりてたきどのゝ心ばへなどおとらず
おもしろき寺也〔六二五・191〕

①滝の音は絶て久しく成ぬれど名こそ流れて猶聞こえけり

(前大納言公任卿集、三三〇)、大殿のまだ所々におはせし時
人々具して紅葉みにありき給ひしに嵯峨の滝殿にて・千載

集卷六、雑上、一〇三、さがの大覚寺にまかりてこれかれ歌

よみ侍りけるによみ侍りける 前大納言公任、「猶聞こえ

けれ」〔河〕猶きこえけれ、〔孟〕〔岷〕〔大〕〔集〕

②あせにける今だにかかる滝つせの早くぞ人は見るべかりけ
る(後拾遺集卷六、雑四、一〇五、大覚寺の滝殿を見てよみ

侍りける 赤染衛門)〔河〕いまだにかゝり(真本かゝる、

〔絶〕〔孟〕、〔岷〕あせにけり、〔大〕

3 露のかゝらぬたぐひうらやましくおほゆ〔六二二・195〕

つゆならぬ心を花におきそめて風吹く毎に物思ひぞつく

(古今集卷三、恋、六六、やよひばかりに物のたうびける

人の許に又人まかりてせをそすと聞きてよみて遣はしけ
る 貫之・古今六帖第一、露、三〇四、貫之)〔細〕〔岷〕〔湖〕
(第二句ノミ)、〔引〕

4 よるひる思はれておなしことをのみさらばわか君をばみたて
まつらでは侍べきかと〔六二四・195〕

老ぬれば同じことこそせられければ君は千世ませ君は千世ま

せ(拾遺集卷五、賀、三、藤原誠信元服し侍りける夜よみ

ける 源順)〔休〕申さるれ(第二句ノミ)、〔拾〕、〔新〕(上句ノミ)

5 みなれそなれてわかるゝほどはたゞならざるを〔六二四・
195〕

みなれ木の見なれそなれてはなれなば恋しからむや恋しか

らじや(未詳)〔釈前〕こひしからじやこひしからんや、

〔釈書〕みなれくてはなるれば恋しからじやむつれなら

ひて、〔奥〕(第二句ノミ)、〔紫〕〔異〕〔河〕〔二〕〔休〕〔孟〕〔屋〕、

6 ありはてぬいのちをかぎりに思て契すぐしきつるを〔六二六・
195〕

ありはてぬ命待つまのほどばかり憂きことしげく思はずも

がな(古今集卷六、雑下、六三、つかさとけて侍りける時

よめる、平貞文・大和物語、六七、「歎かずもがな」)〔釈

前〕ほどだにもなげかずもがな、〔奥〕〔紫〕、〔異〕〔湖〕

歎かずもがな、〔河〕、〔休〕憂き事なくて過してしがな、

7 よするなみにそへてぬれがちなり〔六二九・195〕

〔絶〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

いとゞしく過ぎ行く方の恋しきにうらやましくもかへる波
 かな(後撰集卷十九、羈旅、二三三、東へ罷りけるにすぎぬる
 方恋しく覚えける程に川を渡りけるに浪の立ちけるを見て
 業平朝臣・伊勢物語、三三) (休(紹)

8 もろともみやこはいできこのたびやひとり野中のみちにま
 どはん(冥四五・196)

ふる道にわれやまどはむ古の野中の草はしげりあひにけり
 (拾遺集卷七、物名、三三三、やまと すけみ、柿本集、一三三三、
 畿内五箇国、やまと、「野中の草と」(河)(三三)(峴)(余)

(全)(事)(評)(集)

9 やがてよをすてつるかどでなりけりと人にもしられにしを
 (五二二・197)

かりそめの行きかひ路とぞ思ひこし今はかぎりの門出なり
 けり(古今集卷十六、哀傷、八三三、甲斐の国にあひ知りて侍
 りける人とぶらはむとてまかりける道なかにてにはかに病
 ひをしていまいまとなりければよみて京にもてまかりて
 母に見せよといひて人につけ侍りける歌 在原滋春・大和
 物語、六三、「思ひしを」(紫)(異)(河)(三三)(峴)(湖)

(事)

10 などかうちをしきせかにてにしきをかくしきこゆらん
 (五五四・197)

①みる人もなくてちりぬる奥山の紅葉はよるの錦なりけり
 (古今集卷五、秋下、二五七、北山に紅葉折らむとてまかれり
 ける時によめる 貫之・古今六帖第六、紅葉、三三三、和漢

朗詠集卷上、秋、落葉、三三(余)

②思へども綾なしとのみいはるれば夜の錦の心地こそすれ
 (後撰集卷十、恋二、男に遣はしける 読人しらす) (余)
 11 心のやみはれまなげきわたり(冥四五・197)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな
 (後撰集卷十、雜二、二〇三、太政大臣の左大将にてすまひの
 かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてか
 れこれ罷りあかれけるにやんごとなき人三人ばかりとゞ
 めてまらうとあるじ酒あまたゞびの後酔にのりて子供のお
 へなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第二、三三三、
 「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、二二六、子の悲
 しきことを集りて云ひければ、中納言) (異)まよひぬる
 かな、(事)(集)

12 さらにぬわかれに御心うごかし給ふなどいひはなつるものから
 (五六一・198)

①老いぬればさらぬ別れもありといへばいよく見まくほし
 き君かな(古今集卷七、雜上、三〇〇、業平朝臣の母のみこ
 長岡に住み侍りける時に業平宮つかへすとて時々も得まか
 りとぶらはず侍りければはすばかりに母のみこのもとよ
 りとみの事とて文をもうできたり、あけて見れば言葉はな
 くてありける歌・伊勢物語、一六〇) (異)世の中に(初句)

②世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もとなげく人の子の
 ため(古今集卷七、雜上、三〇一、かへし 業平朝臣・伊勢
 物語、一六〇・業平集、一六〇) (紫)(河)(三三)(峴)(湖)千代

もとのる、〔引〕、〔新〕〔下句ノミ〕、〔全〕〔対〕〔事〕〔六〕〔評〕
〔集〕

13 むかしの人もあはれといひけるうちのあさぎりへだよりゆく
まんに (五六六・198)

ほのぼのと明石の浦の朝きりに鳥かくれゆく舟をしぞ思ふ

(古今集卷六、驛旅、四六、題しらず 読人しらず・古今六

帖第三、舟、三三三二、人麿・柿本集、一五五五、和漢朗詠集卷

下、行旅、杳杳)〔葉〕異〔河〕、〔花〕〔下句ノミ〕、〔弄〕(一)

〔細〕〔初句ノミ〕、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕

〔集〕

14 いまさらにかへるもなをおもひつきせずあま君はなき給(五六
8・198)

雁のくる嶺の朝きりはれずのみ思ひつきせぬ世の中のうき

(古今集卷六、雑下、五三、題しらず 読人しらず・古今六

帖第一、霧、三三三二、「世中のうき」)〔休〕〔紹〕、〔岷〕〔強て

引に不及事歎)

15 いくかへりゆきかふ秋をすぐしつゝうき木にのりてわれかへ
るらん (五六二・199)

① 天の川通ふ浮木にこと問はむ紅葉の橋はちるやちらずや

(新古今集卷七、雑中、二五三、題しらず 藤原実方朝臣)

〔休〕ちるやちらずぬや、〔紹〕

② 天の川うき木にのれる我なれやありしにあらす世はなりに

けり(未詳) 〔拾〕

16 すこしひくに松風はしたなくひびきあひたり (五七六・199)

琴の音に峯の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけ
む(拾遺集卷六、雑上、四二、野宮に斎宮の庚申し侍りける

に松風入ニ夜琴)といふ題をよみ侍りける 斎宮女御・古今

六帖第五、こと、三三三三・和漢朗詠集卷下、管絃、四六、「か

よふなり」)〔余〕〔事〕〔評〕〔集〕

17 おのゝえさへあらため給はむほどやまちどをにて (五六四・

200)

① 斧の柄は朽ちなば又もすげ替む浮き世の中に返らずもがな

(古今六帖第三、をのゝえ、三三三三)〔釈前〕〔奥〕〔葉〕〔異〕

〔河〕〔休〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕

② 古郷は見しごともあらず斧のえのくちし所ぞ恋しかりける

(古今集卷六、雑下、五三、つくしに侍りける時に罷り通ひ

つゝ暮うちける人の許に京に帰り詣できて遣しける 紀友

則・古今六帖第三、をのゝえ、三三三三、友則・友則集、一九三

三、筑紫にありける時に通ひて暮など打ちける人のもとに

京へ上りて後にやりける)〔孟〕〔事〕

18 れいのくらべくるしき御心にしへのありさまなごりなしと
(五六五・200)

世の中はくらべくるしく成にけりながくみじかく思ふすぢ

なし(未詳) 〔引〕

19 思ひむせべる心のやみもはるゝやうなり (五六九・201)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

(後撰集卷五、雑二、二〇三、太政大臣の左大将にてすまひの

かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ

れかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとゞめてまらうとあるじ酒あまたゞびの後酔にのりて子供のうちなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第二、三三三、親、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一三三、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言「事」評すぐれたる人の山ぐちはしるかりけれとうちゑみたるかほの(五六13・201)

①秋霧の立ちまふ嶺の山ぐちはかねてぞしるし移ろはむとて(古今六帖第一、霧、三三〇) [河]かねてぞしるき、[孟]〔岷〕〔拾〕立ちまふ山の、〔対〕

②人よりも思ひのぼれる君なればうへ山口はしるくざりける(古今六帖拾遺、三三三) [河]〔絶〕〔孟〕〔拾〕むへ山口はしるくなりけり、〔休〕むへ山口はしるくありけり、〔岷〕〔湖〕しるくなりけり、〔事〕

③いちじるき山口ならばこゝながら袖の気色を見せよとぞ思ふ(蜻蛉日記、一五九) [河]〔孟〕〔岷〕

21 たつときものうく心とまるくるしかりきなど(冥行・202) 今日のみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花の蔭かは

(古今集卷二、春下、一四、亭子院の歌合に春のはての歌 躬恒・躬恒集、一四〇)・亭子院歌合、三三六、躬恒・和漢朗詠集卷上、春、三月尽、五〇〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕

22 あらいそかげに心ぐるしうおもひきこえさせはべりし(五〇九・203)

みさごゐる荒磯浪に袖濡れて誰が為拾ふいけるかひぞも

(古今六帖第五、たのむる、三三〇)〔釈前〕、〔釈書〕あらいそかげに袖ぬらし、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕

23 ふたばのまつもいまはたのもしき御をひさきといはぬきこえさするをあさきねざしゆへやいかゞと(五〇九・203)

千代へむと契りおきてし姫松のねざしとめてし宿は忘れじ(後撰集卷十、恋三、五三、方たがへに人の家に人を具してまかりて帰りて遣はしける 読人しらす)〔釈前〕〔異〕姫

小松ねざしとめてし宿は忘れず、〔奥〕〔河〕〔孟〕〔岷〕いはひそめてし…ねざしそめてし宿は忘れず、〔紫〕宿は忘れず、〔休〕〔絶〕いはひ置てし…ねざしそめてし宿は忘れず、〔余〕〔事〕

24 つくろはれたるみづのをとまひかごとがましうきこゆ(五〇九・203)

影みてもうきわが涙落ちそひてかごとがましき滝の音かな(紫式部集、三三三)・続後撰集卷十、雑上、一〇六、東北院の渡殿の遣水にかけを見てよみ侍りける 紫式部)〔拾〕〔余〕〔集〕

25 すみなれし人はかへりてたどれどもしみづはやどのあるじがほなる(五〇九・203)

宿あれて昔の人は見えねどもすみにし水のためぬをぞみる(兼澄集、大成木、一三)〔余〕

26 いさらぬははやくのこともわすれしをもとのあるじやおもがはりせる(五二二・203)

我が門のいさゝ小川の真清水のましてぞ思ふ君独りをば

(古今六帖第三、わきて思ふ、三言七) (拾)〔余〕いさら小川の

27 あはれとうちながめてたち給ふすがだにほひ世にしらずとの
みおもひきこゆ (五九二・203)

荒れにけり哀れいく世の宿なれや住みけむ人の音づれもせ
ぬ (古今集卷六、雑下、六四、題しらず 読人しらず・伊
勢物語、二〇・古今六帖第三、やど、三三三、伊勢) (紫)

28 いとさとくをしやとのたまへばはるかに思たまへたえたりつ
る (五九二・205)

①里遠みいかにせよとかかくのみはしはしも見ねば恋しかる
らむ (元真集、三〇三、人の困なる女に) (河)〔孟〕しばし

も見ぬは、△花▽〔弄〕〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕
〔引〕〔拾〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②山高み人もすさめぬさくら花いたくなわびそわれ見はやさ
む (古今集卷二、春上、五、題しらず 読人しらず・猿丸
大夫集、一五二、山里にまかりけるに桜の咲きたるを見て
詠める) (異)里遠み〔初包〕：物な思ひそ、〔河〕〔孟〕里遠み

③里遠みうらぶれにけりませ鏡床のへさらず夢に見えこそ
〔万葉集卷十、二二〇〕 (拾)〔余〕

29 き丁にはたかくれたるかたはらめいみじうなまめいてよしあ
り (五九五・206)

しどけなきねくたれ髪をみせじとやはた隠れたるけさのあ
さがほ (小町集、一九六、拾)

30 やへたつ山はさらにしまがくれにもおとらざりけるを (五九四
1・207)

①白雲のたえずたなびく峯にだにすめば住みぬる世にこそあ
りけれ (古今集卷六、雑下、五三、題しらず 惟喬のみこ・
古今六帖第三、峯、三八五・小町集、一九六、物にぞありけ
る) (釈前)〔岷〕八重たつ山の：住めばすまる、〔奥〕山

にだに第三包、〔紫〕〔異〕〔河〕〔屋〕やへたつ山の、△弄▽、
〔新〕〔余〕やへたつ山の奥にだに住めばすまる、物にぞ有
ける、〔全〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②身をうしと人しれぬよを尋ね来し雲の八重立つ山にやは
あらぬ (後撰集卷六、雑二、二五、かへし 読人しらず)

〔河〕〔休〕〔岷〕人しれず世を、△細▽、〔紹〕人しれず世の、
〔孟〕〔余〕

③都より雲の八重たつ奥山のよ川の水はすみよかるらむ (新
古今集卷六、雑下、三二六、少将高光横川にのぼりてかしら
おろし侍りにけるを聞かせたまひて遣しける 天曆御歌・
大鏡卷四、六〇八、「よがはの軒は」) (河)〔孟〕〔岷〕〔引〕〔余〕

④百敷の内のみつねに恋しくて雲の八重たつ山はすすみうし
〔新古今集卷六、雑下、二七七、御かへし 如覚・大鏡卷四、
六〇九、「九重の内のみ常は」) (河)〔孟〕九重の〔初包〕、〔岷〕九

重の：山は住みうき、〔拾〕〔余〕ゆかしくて

31 さらにしまがくれにもおとらざりけるを (五九四1・207)

ほのぼのと明石の浦の朝ぎりに島がくれゆく舟をしぞ思ふ
(古今集卷六、羈旅、四九、題しらず 読人しらず・古今六

帖第三、舟、三六三、人麿・柿本集、一五八五・和漢朗詠集卷下、行旅、四三〇〔河〕〔孟〕〔岷〕〔初句ノミ〕、△細▽△屋▽

〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕

32 まつともむかしのとたどられたるに〔五四一・207〕

たれをかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに〔古今集卷下、雑上、二六元、題しらず 藤原興風・古今六帖第六、松、二四九番、興風・興風集、一三三六、和漢朗詠集卷下、交友、四〇〕

〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕、〔余〕〔第二句ノミ〕、〔全〕〔対〕〔事〕

〔大〕〔評〕〔集〕

33 わすれぬ人もものし給ひけるに〔五四二・207〕

今迄に忘れぬ人は世にもあらしおのがさまま年の経ぬれば〔伊勢物語、一五二・業平集、一六五〇・古今六帖第六、昔あへる人、三七七番・新古今集卷下、恋三、二二五、題しらず 読人しらず〕

34 いとかるくしきかくれがみあらはされぬこそねたういたうからがり給〔五四五・207〕

み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時の隠れがにせむ〔古今集卷下、雑下、二七五、題しらず 読人しらず〕

〔紫〕〔異〕

35 山のにしきはまだしう侍りけりのべの色こそさかりにはべり

けれ〔五四八・207〕

霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦のおればかつちる〔古今集卷下、秋下、二九一、題しらず 関雄〕

〔紫〕〔異〕〔河〕

〔細〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔評〕

36 ことりしるしばかりひきつけさせたるおきのえだなどつとにして〔五四二・208〕

①秋萩のふるえにさける花みればもとの心は忘れざりけり〔古今集卷四、秋上、三二六、昔あひ知りて侍りける人の萩の野にて逢ひて物語しけるついでによめる 躬恒〕

②萩の露玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながら見よ〔古今集卷四、秋下、三三三、題しらず 読人しらず〕

〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕

③見てのみや人に語らむ桜花手毎に折りていへつとにせむ〔古今集卷二、春上、三三、山の桜をみてよめる 素性法師〕

〔紫〕〔異〕

④なよ竹に枝さしかはすしのすゝき夜ませに見えむ君は頼まじ〔古今六帖第六、一夜隔てたる、三三三番〕

⑤夏刈りの萩の古枝も萌えにけり群居し鳥も空に有らむ〔源重之集、一九九番・新古今集卷下、冬、六三三、題しらず 源重之〕

「萩の古枝はかれにけり群居し鳥は」〔河〕おきのふるえはかれにけりむれるし鳥は、〔孟〕ふるえ―しはかれにけり、〔岷〕萩の古枝は枯れにけりむれなく鳥は

37 月のすむかはのをちなる里なればかつらのかげはのどけかるらむ〔五五八・208〕

久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる〔古今集卷下、雑下、二九六、桂に侍りける時に七条の中宮とは

せ給へりける御かへり事に奉れりける 伊勢・古今六帖第
二、里、三、四、伊勢、「月の桂の」(第二句)・伊勢集、二、三、
御かへし、「君なれば」(第三句) (五)

38 ひさかたのひかりにちかき名のみしてあさゆふぎりもはれ
ぬ山里…中におひたるとうちずんじ給ふついでに (五五14・
209)

久方の中におひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる (古
今集卷六、雑下、六六、桂に侍りける時に七条の中宮とは
せ給へりける御かへり事に奉れりける 伊勢・古今六帖第
三、里、三、四、伊勢、「月の桂の」・伊勢集、二、三、六、御か
へし、「君なれば」(「釈前」やどなれば、「釈書」(奥)(紫)、
〔異〕宿なれば光をみてぞ、「河」△弄▽〔細〕(休)〔紹〕(屋)
〔岷〕(湖)〔引〕(新)〔全〕〔対〕(事)〔大)〔評〕(集)

39 かのあわちしまをおほしいでゝみつねがところからかとおほ
めきけむこと (五五11・209)

淡路にてあはと雲居に見し月の近き今宵は所がらかも (古
今六帖第一、雑の月、三三〇、躬恒・躬恒集、二、四七、十五
夜月)〔釈前〕(河)〔休)〔紹)〔孟)〔岷)〔湖)〔引)〔新)あは
と遥かに、「釈書」あはとはるかに…所がらにも、「奥」
(上句ノミ)、「あはとはるかに」(紫)、「異あはとはるか
に…ちかき今夜も、「弄」(一)〔第二句ノミ)、「屋あはち
島あはとはるかに、△玉▽〔全)〔対)〔事)〔集)

40 めぐりきててにとるばかりさちけきやあはちのしまのあはと
みし月 (五五4・209)

久方は手にとるばかりなりにけり雲のゐるてふ寺に宿りて
(惠慶法師集、三、三六、東山にて月あかき夜)〔拾)〔余)
ひさかたの

41 雲のうへのすみかをすてゝよはの月いづれのたにゝかげかく
しけむ (五五7・210)

草深き霞の谷に影隠して日のおくれし今日にやはあらぬ
(古今集卷十六、哀傷、(六、深草の帝の御国忌の日よめる
文屋康秀)〔細)〔岷)〔上句ノミ)、「休)〔紹)〔孟)〔湖)

42 をのゝえもくちぬべけれどけふさへはとていそぎかへり給
ふ (五五9・210)

①古郷は見しこともあらず斧のえのくちし所ぞ恋しかりける
(古今集卷十六、雑下、六九、つくしに侍りける時に罷り通ひ
つゝ暮うちける人の許に京に帰り詣できて遣しける 紀友
則・古今六帖第三、をのゝえ、三、六、友則・友則集、一、五
五)〔釈前)〔釈書)みしにもあらず、「奥)〔紫)〔異)〔河)〔孟)、
〔岷)〔私)云此歌を引に不及也)

43 近衛つかさのなだかきとねりものゝふしどもなどさぶらふ
にさうくしければそのこまなどみだれあそびて (五五12・
210)

葦駁のや 森の下なる 若駒率て来 葦駁の 虎
毛の駒(末) その駒ぞや 我に 我に草乞ふ 草は取り
飼はむ 水は取り 草は取り飼はむや(末)〔神楽歌、其駒、

③〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕
〔事〕〔評〕〔集〕

44 われはわれと思なし給へとをしへきこえ給ふ(五七〇・211)

うつつにてたれちぎりけむ定めなき夢路にまよふ我はわれ

かは(後撰集卷十一、恋三、七三、かへし 読人しらす)〔余〕

〔事〕〔評〕

45 ひるのがよはひにもなりにけるを(五八五・212)

かぞいろはいかにあはれと思ふらむ三年になりぬ足たたず

して(和漢朗詠集卷下、詠史、六七・日本紀竟宴和歌、大

江朝臣朝綱、「あはれとみずやひるの子は」〔紫〕〔異〕

〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔眠〕〔湖〕〔引〕、〔新〕〔第四句ノミ〕、〔全〕

〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

46 としのわたりにはたちまさりぬへかめるを(五八三・212)

①天の川とほき渡りにあらねども君が舟出は年にこそまで

(拾遺集卷三、秋、一四、題しらす 柿本人麿)〔紫〕〔河〕

〔孟〕〔眠〕

②玉かつらたえぬものからあら玉の年の渡りはたゞひと夜の

み(後撰集卷三、秋上、三三、題しらす 読人しらす・古今

六帖第一、七日の夜、三〇三、「さぬるよは年のわたりに」・

万葉集卷十、二〇六、七夕、「さぬらくは年の渡りに」〔異〕

天の河…たゞ一よのみ、〔河〕あまの河…たゞ一よきみ

(真本ただ一夜のみ)、〔休〕〔紹〕天の河(初句)、〔孟〕天の川…た

ゞぬ夜ぞなき、〔眠〕〔湖〕天の川…年のわたりに、〔全〕

〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

薄雲

1 つらき所おほく心みはてむものこりなき心ちすべきを(六〇三

3・215)

宿かへて待つにも見えずなりぬればつらきところの多くも

あるかな(後撰集卷十一、恋三、七〇六、かりそめなる所にはべ

りける女に心かはりにける男のこゝにてはかくびんなき所

なれば心ざしはありながらなむえ立よらぬといへりければ

所をかへて待ちけるに見えざりければ 女)〔釈前〕〔奥〕

〔紫〕、〔異〕つらき所も、〔河〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔眠〕

〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

2 いかにいひてかなどいふやうに思ひみだれたり(六〇三・

215)

恨みての後さへ人のつらからばいかに言ひてかねをも泣か

まし(拾遺集卷十一、恋三、九三、題しらす 読人しらす)

〔釈前〕ねをばなかまし、〔奥〕〔紫〕〔河〕〔弄〕〔一〕〔休〕〔紹〕

〔孟〕〔屋〕〔湖〕ねをもなくべき、〔異〕恨みても、〔細〕ねを

ばなくべき、〔眠〕〔引〕、〔玉〕〔第二句ノミ〕、〔全〕〔対〕〔事〕

〔大〕〔集〕

3 わが身はとてもかくてもおなじ事おいさきとをき人の御うへ

も(六〇四・216)

世の中はとてもかくても同じこと富もわらやも果てしなけ

れば(新古今集卷十六、雑下、一五三、題しらす 蟬丸)〔拾

〔新〕〔余〕

4 又てをばなちてうしろめたからむことつれぐもなぐさむかたなくては (六四六・216)

たらちねの母が手放れかくばかりすべなき事はいまだせなくに (万葉集卷十、三六六) (拾)〔余〕

5 かゝるみ山がくれにはなにはへかあらむ (六四六・217)

形こそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばさりなむ (古今集卷七、雑上、二七五、女どもの見て笑ひければよめる 兼芸法師・古今六帖第三、法師、三三〇〇、けうせい法師)

〔紫〕〔異〕〔河〕

6 さかしき人の心のうらごにもものとはせなどするにも (六四七・218)

かくこひむ物とは我も思ひにき心のうらごまさしかりける (古今集卷十四、恋四、七〇〇、題しらず 読人しらず) (釈前)

つらからんものとはかねて…心のうらや、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕つらからんものとはかねて、〔孟〕、〔岷〕〔引歌に不

及歎〕、〔湖〕、〔引〕〔新〕ものとはかねて

7 ゆきまなきよしの山をたづねても心のかよふあとたえめやは (六四九・219)

もろこしの吉野の山にこもるともおくれむと思ふ我ならなくに (古今集卷六、雑体、誹諧、二〇四、題しらず 左のお

ほいまうち君・伊勢集、二二〇、男返し) 〔紫〕〔一〕〔細〕〔休〕〔岷〕(上句ノミ)、〔紹〕〔湖〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

8 心のやみをしはかり給に (六四九・220)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

(後撰集卷十五、雑二、二〇三、太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとゞ

めてまらうどあるじ酒あまたゞびの後酔にのりて子供のうちなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、親、

三三三、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、二六二、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言) 〔紫〕〔事〕

〔大〕〔評〕〔集〕

9 おひそめしねもふかければたけくまの松にこまつのちよをならべん (六五二・221)

植ゑし時契りやしけむたけくまの松を二たび逢ひ見つるかな (後撰集卷七、雑三、二四三、みちのくにの守にまかり下

れりけるにたけくまの松の枯れて侍りけるを見て小松を植ゑつがせ侍りて任果て、後又同じ国にまかりなりて彼のさ

きの任に植ゑし松を見侍りて 藤原元善朝臣) 〔集〕

10 ひめ君のたすきひきゆい給へるむねつきぞうつくしげさそひて (六五九・222)

① 祈りつゝ結ぶはかまの腰にまたたすきに千代をかけてけるかな(未詳) 〔異〕

② 玉だすきかけぬ時なしわが恋は時雨し降らば濡れつつも行かむ (万葉集卷十、三三六、柿本集、二五〇六、「かけぬ時なく

我が恋ふる…濡れつゝも来む」・古今六帖第一、時雨、三三六、「かけぬ時なく我が恋ふる」) 〔河〕〔孟〕かけぬ時さへ我

恋ふとゝぬれつゝもこん、(岷)かけぬ時なくわれ恋ふと
 …ぬれつゝもみん
 ③緑子の 若子が身には たらちし 母に懐かえ 襦袢の
 平生が身には 木綿肩衣 純裏に縫ひ着 頸着の 童児が
 身には ゆひはたの 袖着衣 着しわれを にほひよる
 子らが同年輩には 蟻の腸 か黒し髪を ま揃もち ここ
 にかき垂り 取り束ね 挙げても纏きみ 解き乱り 童児
 に成しみ さ丹つかふ 色懐しき 紫の 大綾の衣 住吉
 の 遠里小野の ま様もち にほしし衣に 高麗錦 紐に
 縫ひ着け 指さふ重なふ 並み重ね着 打麻やし 麻積の
 児ら あり衣の 宝の子らが 打袴は 経て織る布 日曝
 の 麻 紵を 信巾裳なす 愛しきに取りしき 屋に経る
 稲置丁女が 妻問ふと われに遣せし をちかたの 二綾
 下沓 飛ぶ鳥の 飛鳥壮士が 長雨禁み 縫ひし黒沓 さ
 し穿きて 庭に彷徨め 退り勿立ちと 障ふる少女が 髻
 髻聞きて われに遣せし 水縹の 絹の帯を 引帯なす
 袴帯に取らし 海神の 殿の蓋に 飛び翔る すがるの如
 き 腰細に 取り飾らひ 真澄鏡 取り並懸けて 己が
 顔 還らひ見つつ 春さりて 野辺を廻れば おもしろみ
 われを思へか さ野つ鳥 来鳴き翔らふ 秋さりて 山辺
 を行けば 懐しと われを思へか 天雲も 行き棚引ける
 還り立ち 路を来れば うち日さす 宮女 さす竹の 舎
 人壮士も 忍ぶらひ かへらひ見つつ 誰が子そとや 思
 はえてある かくの如 せられし故に 古 さざきしわれ

や 愛しきやし 今日やも子等に 不知にとや 思はえて
 ある かくの如 せられし故に 古の 賢しき人も 後の
 世の 鑑にせむと 老人を 送りし車 持ち還り来し 持
 ち還り来し (万葉集卷十六、三九二) (初)緑子之 若子蚊見
 庭 垂乳為 母所懐 襦袢乎 生蚊見庭 結経方衣 水
 津裡丹縫服(二部ノミ)

11 御さしぬきのすそにかゝりてしたひきこえ給ほどに(三二一六・
 224)

①衣手に取りとどこほり泣く児にもまされるわれを置きて如
 何にせむ(万葉集卷四、四四二、田部忌寸櫛子・古今六帖第三
 わかいこ、三三七) (河)いかゞせん

②からごろも裾に取りつき泣く子らを置きてぞ来のや母なし
 にして(万葉集卷三、四〇〇、他田舎人大島) (河)をきて
 ぞきぬやいもなしにして

12 あすかへりこむとくちずさびていで給に(三二一八・224)

①桜人 その船ちぢめ 鳥つ田を 十町つくれる 見て帰り
 来むや そよや 明日帰り来む そよや 言をこそ 明日
 ともいはめ 遠方に 妻ざる夫は 明日もさね来じや そ
 よや さ明日もさね来じや そよや(催馬楽、桜人、元)

(釈前)左久良比とお曾乃不禰江、和々ツ女之末川宇多平
 『山万安知川宇久礼留』見天『可世、戸礼』己お年『一曾於
 与於ツ、也己と平己曾お安須と毛ツ、以波安、女』平千『可
 安左余』川万乃左『留ウテ世那』波安春毛お左安禰ツ、己久
 也』曾お与お左安春毛左安、禰己之也曾お与お也、八釈

書、(奥)左久良比止曾乃不禰知、女之末川多乎止万知

川久礼智見天可安戸利己牟也曾与也安春可戸利己牟曾於
与於己止お己曾安春止毛以波女乎千可太に川万左留世那
波安春毛左禰己之也於曾与左左安春毛左称己之也曾也、

(紫)(異)〔河〕△花▽△弄▽(一)△細▽〔休〕〔絶〕△孟▽
△屋▽〔岷〕〔湖〕〔引〕△拾▽〔新〕△余▽〔全〕〔对〕〔事〕〔評〕
〔集〕

②松田へ鶴鳴き渡るあゆち瀉潮干にけらし鶴鳴き渡る (万葉
集卷三、三二、高市連黒人) 〔拾〕〔新〕〔余〕

13 舟とむるをちかた人のなくはこそあすかへりこむせなとまち
みめ (二一〇・224)

遠方の花も見るべく白波のともによわれも立ち渡らまし
我にていみじう恋しかりぬべきさまをとつちまもりつゝ (二
拾遺集卷十六、雑卷、一四〇、題しらず 貫之) 〔河〕〔孟〕
14 14・224)

春はなほわれにて知りぬ花盛り心のどけきひとはあらじな
(拾遺集卷一、春、三、平定文が家の歌に 忠岑・忠岑集、
一七三、仲・古今六帖第一、仲の春、三三三、忠岑) 〔拾〕

15 夢のわたりのうきはしかとのみうちなげかれて (二一九・
225)

世の中は夢のわたりの浮橋かうち渡りつゝものをこそ思へ
(未詳) 〔釈前〕はしかとよ、〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕、〔弄〕
(初句ノミ)、〔河〕、〔一〕〔打ちわたしつゝ〕、〔休〕、〔絶〕〔引歌〕
に不及、〔孟〕〔引歌なくても〕、〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕

〔全〕〔对〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

16 そのとしおほかたよのなかさはがしくておほやけさまにもの
ゝさとしげく (二四〇・227)

定めなき世を聞く時の涙こそ袖の上なる淵瀬なりけれ (伊
勢集、一三三、世の騒がしき頃・古今六帖第四、かなしび、
三三三、伊勢、「世を聞く頃の」・続後撰集卷十六、雑下、三三
七、世のはかなさを思ひてよみ侍りける 伊勢) 〔拾〕

17 心にかなふわざならねばかけとどめきこえむかたなく (二七
1・230)

命だに心にかなふものならば何か別れのかなしからまし
(古今集卷八、離別、三六、源のさねがつくしへ湯あみむと
て罷りける時に山崎にて別れ惜みける所にてよめる しろ
め・古今六帖第四、別、三三〇、「悲しかるべき」・大和物語、
六五、和漢朗詠集卷下、餞別、四〇) 〔新〕〔余〕〔集〕

18 ことしばかりはとひとりごち (二一三・231)

深草の野辺の桜し心あらは今年ばかりはすみぞめにさけ
(古今集卷十六、哀傷、八三、堀川のおほきおほいまうち君身
まかりける時に深草の山にをさめてける後に詠みける か
むつけの峯雄・古今六帖第四、かなしび、三三三、「野辺の
桜も」) 〔釈書〕野への桜も、〔釈前〕〔奥〕〔紫〕、〔異〕〔山〕の桜
も、〔河〕、〔一〕〔正句ノミ〕、〔休〕〔絶〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕
〔引〕〔全〕〔对〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

19 天げんおそろしく思給えらるゝ事を心にむせび侍つゝいのち
をはり侍りなば (二九六・232)

しろたへの袖別るべき日を近み心にむせびねのみし泣かゆ
〔万葉集卷四、空冥、紀女郎・古今六帖第四、別、三三三、〕心
にむせで泣きのみぞなく・玉葉集卷六、旅、二〇号、題しら
ず 紀郎女、〔泣きのみぞ泣く〕〔拾余〕

20 せむざいどもこそこのこりなくひもとき侍りにけれ〔六六1・
239〕

もも草の花のひもとく秋の野に思ひたはれむ人などがめそ
〔古今集卷四、秋上、三〇号、題しらず 読入しらず・古今六
帖第三、野辺、三〇五号、〕思ひみだれむ・小町集、一六三
〔秋前〕〔紫〕〔異〕〔河〕ひもとく秋の夕ぐれに、〔細〕〔第二
句ノシ、〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔湖〕〔事〕〔集〕

21 かくればとにやすこしなき給けはひ〔六六五・240〕

① いにしへの昔のことをいとどしくかくれば袖に露けかりけ
る〔未詳〕〔秋前〕〔休〕〔紹〕露かゝりける、〔奥〕〔紫〕〔異〕、
〔河〕〔弄〕〔細〕〔孟〕〔湖〕〔唄〕かくれば袖ぞ、〔一〕〔屋〕〔拾
全〕〔大〕〔集〕

② わが思ふ人は草葉の露なれやかくれれば袖のまつしほらむ
〔拾遺集卷三、恋三、三六、題しらず 読入しらず〕〔河〕
〔弄〕〔孟〕〔唄〕〔引〕〔新〕〔余〕まつそぼつらむ、〔全〕〔対〕
〔事〕〔大〕〔集〕

22 もえしけぶりのむすぼくれたまひけむは〔六六三・240〕

むすぼくれ燃えし煙もいかせん君だにこめよ若きちぎり
を〔未詳〕〔秋前〕〔奥〕、〔紫〕〔河〕〔休〕もえし煙を…ながき
契りを、〔異君だにこめて長き契りを、〕〔弄〕〔細〕もえし

煙を：君だにかけよながき契りを、〔一〕もえし煙を：君
だにこめばながき契りを、〔孟〕もえし煙を、〔唄〕、〔湖〕
〔引〕〔拾君だにかけよながき契りを、〕〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕
〔集〕

23 もろこしには春の花のにしきにしくものなしといひはべめり
やまとことのはには秋のおはれをとりたてゝおもへる〔六六
4・242〕

① 冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲
かざりし 花も咲けれど 山を茂み 入りても取らず 草
深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば
取りてそしのお 青きをば 置きてそ歎く そこし恨めし
秋山われは〔万葉集卷一、一六、額田王〕〔河〕〔孟〕〔唄〕〔新〕
〔対〕〔大〕〔集〕

② 春はたゞ花のひとへに咲くばかり物の哀れは秋ぞまされる
〔拾遺集卷六、雑下、三二、題しらず 読入しらず〕〔花〕
〔弄〕〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔全〕〔対〕〔大〕
〔集〕

24 いづれもとき時につけてみたまふにめうつりて〔六六六・
242〕

① 大かたの秋に心はよせしかど花みる時はいづれともなし
〔拾遺集卷六、雑下、三二、〕元良のみこ承香殿のとし子に春
秋いづれかまさるととひ侍りければ秋もをかしう侍りとい
ひければおもしろきさくらをこれはいかゞといひて侍りけ
れば〔河〕〔紹〕〔孟〕〔唄〕

②春秋におもひ乱れてわきかねつ時につけつゝうつる心は

(拾遺集卷六、雑下、三六六、ある所に春秋いづれかまきると
とはせ給ひけるによみて奉りける 貫之・貫之集、一〇三三
ある所に春と秋といづれか優ると問はせ給ひけるに詠み
て奉りける) (河)〔細〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕

〔事〕

25 えこそ花鳥の色をもねをもわきまへ侍らね (三六六・242)

花鳥の色をも音をもいたづらに物うかる身はずぐのみな
り (後撰集卷四、夏、三三、かへし 藤原雅正) (紫)〔休〕、

〔細〕〔湖〕過ぐすべらなり、〔評〕〔集〕

26 いつとなきなかにあやしときしゆふべこそ (三六六・242)

①秋のよのあやしきほどのたそがれに荻吹く風のをとぞ身に
しむ (未詳) (紫)〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕

②いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかり

けり (古今集卷十、恋一、五八、題しらず 読人しらず・小
町集、一九六六、「あやしかりけり秋の夕暮」) (河)なけれど
も (第三句)、「弄」(上句ノミ)、「一」(細)〔休〕〔孟〕〔屋〕
〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔集〕

27 つらからむとてわたり給ひぬ (三六六・243)

①つらからん人のためにはつらからんつらきはつらき物とし
らせん (未詳) (紫)〔異〕〔河〕、〔弄〕〔一〕〔休〕〔細〕〔孟〕〔岷〕
〔湖〕つらくして(第三句)、「細」つらくして…物としらな
ん、〔屋〕〔拾〕〔新〕

②思ふ人おもはぬ人の思ふ人思はざらなむおもひしるべく

(後撰集卷六、恋一、五三、思ふ人侍りける女に物のたうびけ
れどつれなかりければ遣はしける) (拾)〔新〕〔余〕

28 いかでかくとりあつめやなぎのえだにさかせたる御ありさま
ならん (三六九・244)

梅の香をさくらの花ににははせて柳が枝に咲かせてしかな
(後拾遺集卷一、春上、二、題しらず、中原致時) (釈前)

〔釈書〕〔奥〕〔異〕〔細〕〔河〕〔休〕〔細〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕

〔新〕梅が香を、〔紫〕梅が香を…さかせたらなん、〔全〕

〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

29 かざり火どものかげのやり水のほたるにみえまがふもおかし
(三三三・245)

晴るゝ夜の星か河辺の螢かも我がすむ方の螢のたく火か
(伊勢物語、一五、新古今集卷七、雑中、二五九) (紫)〔異〕

30 いさりせしかげわすられぬかざり火は身のうき舟やしたひき
にけん (三三五・245)

思ひきや鄙の別れにおとろへて螢の縄たぎいさりせむとは
(古今集卷六、雑下、六六、隱岐の国に流されて侍りける時
によめる 篁朝臣・古今六帖第四、別、三三〇) (河)〔孟〕
〔岷〕

31 あさからぬしたの思ひをしらねばや猶かざり火のかげはさは
げる (三三七・246)

かがり火の影となる身のわびしきは流れて下にもゆるなり
けり (古今集卷十、恋一、五三、題しらず 読人しらず・古
今六帖第三、夜河、三三六、貫之) (花)〔休〕〔細〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕

32 たれうきものをしかへしうらみ給へる (三三・七・246)

〔湖〕〔対〕〔事〕〔六〕〔集〕

①うたかたも思へば悲し世の中をたれうきものと知らせそめ

けむ (古今六帖第三、うたかた、三三六・同第三、思ひわづらふ、三三六)

〔細〕〔五〕〔屋〕〔帳〕〔湖〕〔拾〕うち返し、〔新〕、〔余〕〔上句〕
ミ、〔打返し〕、〔全〕〔対〕〔事〕〔六〕〔集〕

②梓弓ひきつのべなるなのりそのたれ憂き物と知らせそめけ

む (新勅撰集卷十四、恋聲、三三、題しらず、読入しらず)

〔引〕ひきつの津なる

1 なが月になりてもゝぞのゝ宮にわたり給ぬるをきよて (六元

3・249)

①大方の秋のはてだに悲しきに今日はいかでか君暮すらむ

(大和物語、四三) 〔河〕〔休〕〔細〕〔五〕〔帳〕〔湖〕

②白妙の妹がころもに梅の花色をも香をもわきぞかねつる

(拾遺集卷二、春七、もゝぞのに住み侍りける前斎院の屏風

に つらゆき・古今六帖第三、雑の衣、言三、一香にも色

にも) 〔河〕、〔五〕わきぞかねぬる、〔帳〕つもる衣に桜花

…わきぞかねぬる、〔湖〕桜花…わきぞかねぬる

2 ほどもなくあれにける心ちしてあはれにけはひしめやかなり

(三三・249)

打ちつけに寂しくもあるか紅葉はも主なき宿は色なかりけ

り (古今集卷十六、哀傷、四六、河原のおほいまうち君の身

まかりての秋かの家のほとりをまかりけるに紅葉の色まだ

深くもならざりけるを見てかの家によみていれたりける

3 神さびにけるとし月のらうかぞへられ侍に (三三・252)

ときかけつ衣の玉は住吉の神さびにけるまつのごすゑに

(後拾遺集卷十六、雑、二六、熊野へまうで侍りけるに住吉

にて経供養すとてよみ侍りける 増基法師) 〔河〕〔五〕〔帳〕

すみのえの

4 いまはなにのいさめにかゝたせ給はむとすらむ (四八・

253)

①恋しくは来ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに

(伊勢物語、三葉・和泉式部日記、五・続千載集卷十三、恋

三・四(一)〔休〕〔細〕、〔拾〕千句ノシ、〔余〕

②鷺の住む筑波の山の裳羽服津のその津の上に率ひ

て未通女社士の行き集ひかかふかがひに人妻に

吾も交はらむあが妻に他も言問へこの山を傾く神

の昔より禁めぬ行事ぞ今日のみはめぐしもな見そ

言も咎むな(万葉集卷六、二五五)〔新ひとつまに吾も交牟

吾妻に人も言問此山をうしはく神のむかしより不禁わざ

ぞ(一部ノミ)

5 なべてよのあはればかりをとふからにちかひしこと、神やい

さめむ (四一三・253)

忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな

(拾遺集卷十四、恋四、八五)題しらず 右近・古今六帖第五、

ちかふ、三六三・大和物語、異(一)〔新〕〔余〕

6 そのよのつみはみなしなどの風にたぐへてきとの給ふ (四三

14・253)

つみとがはしなどの風にまかせたりさすらへぬらん大海の

原に(未詳)〔河〕(一)、〔休〕たぐへてき(第三句)、〔細〕(五

〔屋〕〔岷〕

7 みそぎをかみはいからばべりけんなどはかなき事をきこゆる

も (四三一・254)

①恋せじのみそぎは神もうけずとか人を忘るゝ罪深しとて

(未詳)〔釈前〕恋せずの…うけずとか、(奥)〔紫〕〔異〕〔河〕、

〔弄〕恋せじとみそぎを神は…罪深くして、〔二〕〔休〕〔細〕

みそぎを神は…罪深くして、〔細〕〔拾〕みそぎを神は、

〔五〕みそぎを神はうけずとは…罪深くて、〔屋〕罪深くし

て、〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔玉〕〔第二句ノシ〕「みそぎを神は」

〔事〕〔評〕

②恋せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにける

かな(伊勢物語、一四・古今集卷十一、恋一、五〇)題しらず

読んしらず、「神はうけずもなりにけらしも」〔花〕〔屋

〔岷〕〔全〕〔対〕〔事〕(一六)〔集〕

③つらき人忘れなむとて被ふればみそぐかひなく恋こそまさ

れ(古今六帖第五、わすれず、三三三)〔余〕

8 よにしらぬやつれをいまでとだにきこえさすべくやはもてな

し給ひける (四三三・254)

君が門今ぞ過ぎ行く出でて見よ恋する人のなれる姿を(住

吉物語)〔釈前〕(奥)〔紫〕〔異〕〔河〕〔細〕〔休〕〔五〕〔五〕〔岷

〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕(大)〔評〕〔集〕

9 かれたる花どもの中にあさがほのこれかれはひまつはれて

あるかなきかきさきてにはひもことにかはれるを (四三〇・

254)

里人のことは夏野の茂くともかれゆく君にあはざらめやは

(古今集卷十四、恋四、七四)題しらず 読んしらず)〔引〕

10 なびきやすなるなどはあやまちもしつべくめできこゆれど

〔六五〕1・256)

千早振神のい垣も越えぬべし大宮人の見まく欲しさに〔伊勢物語、二五〕〔新〕

11 やくとは御文をかき給へば〔六五〕5・257)

秋までの命もしらず春の野に萩の古枝をやくときくかな〔後拾遺集卷二、春上、咒、題しらず 和泉式部・和泉式部集、四〇四〕〔河〕やくとやく哉、〔五〕哀もしらず…萩の古枝のやくとやくなり、〔岷〕哀もしらず…やくとやく哉

12 しほやきごろものあまりめなれみたてなくおぼさるゝにや…なれゆくこそげにうきことおほかりけれとばかりにて〔六五〕13・258)

① 須磨のあまのしほやき衣なれゆけばうとくのみこそなりまさりけれ〔未詳〕〔釈前〕すまの浦の…うきたのみこそ、〔釈書〕うきめのみこそ見えまさりけれ、〔奥〕うけたのみこそ、〔紫〕うきめのみこそ、〔異〕うけたのみこそなりまさりけれ、〔河〕△弄√〔二〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕すまの浦の、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔全〕〔对〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

② なれ行くは浮き世なればや須磨のあまの塩やき衣まどほなるらむ〔斎宮集、一六四〕、後にうち寄りまどほにあれやと聞えさせ給へる御返りに古今六帖第五、塩やき衣、四三三〔河〕〔二〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔对〕〔事〕〔大〕〔集〕

③ 須磨の海人の塩焼き衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず〔万葉集卷三、四三、大綱公人主〕〔拾〕〔余〕

④ 須磨の海人の塩焼き衣の馴れなばか一日も君を忘れて思はむ〔万葉集卷六、四四、反歌、山部宿禰赤人〕〔拾〕〔新〕〔余〕

⑤ 志賀のあまの塩焼き衣なれぬれど恋といふものは忘れかねつも〔万葉集卷二、三三三、古今六帖第五、塩やき衣、四三三、

「なれ行けば恋てふものは」統古今集卷十四、恋四、三三四、題しらず 柿本人丸、「なるれども恋てふものは」〔拾〕〔余〕なるといへど恋てふものは

13 おやなしにふせるたび人とはぐゝみ給へかしとて〔六五〕2・260)

しなてるや片岡山にいひに飢ゑてふせる旅人あはれ親なし〔拾遺集卷三、哀傷、一三三、聖徳太子片岡山の山辺道人の家に坐しけるに餓ゑたる人道のほとりにふせり、太子の乗りたまへる馬とゞまりてゆかず、おちをあげて打ち給へどしりへしりぞきてとゞまる、太子即馬よりおりて餓ゑたる人のもとに歩みすゝみ給ひて紫の上の御ぞをぬぎてうゑ人の上に覆ひ給ふ、歌をよみて宣はく〕〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔二〕〔下句〕ミ、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔对〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

14 いひこしほどになどきこえかゝるまばゆさよ〔六五〕5・260) 身をうしといひこし程に今はまた人の上とも歎くべきかな〔未詳〕〔釈前〕けふはまた第三句、〔釈書〕なげきつる哉、〔奥〕〔紫〕、〔異〕いましてまた人のうへをも、〔河〕なげきつる哉〔真本なげくべき哉、〔弄〕〔二〕〔細〕、〔休〕人の上にも成りぬべき哉、〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔全〕〔对〕

〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

15 女御かういあるはひたすらなくなり給 (孟_下・261)

ひたすらに我が思はなくに己れさへかりくとのみ鳴き渡
るらん (後撰集卷七、秋下、三_孟、題しらず 読人しらず)

〔河〕〔孟〕ひたすらと

16 としふれどこの契こそわすられねおやおやとかいひしひと
こと (孟_下・261)

親の親と思はましかは問ひてまし我が子の子にはあらぬな
るべし (拾遺集卷六、雑下、孟_下、源重之が母の近江のこふ
に侍りけるにうまごの吾妻よりよるのぼりて急ぐ事侍りて
え此度逢はで上りぬることと言ひて侍りければおばの女よ
み侍りける・重之集、元六三、うまごのよりこで京へ行く
を恨みて女にかはりて) 〔河〕〔細〕〔休〕〔孟〕〔孟〕〔湖〕

〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

17 人づてならでのたまはせんをおもひたゆるふしにもせんと
(孟_下・262)

①今は唯思ひ絶えなむとばかりを人伝ならでいふよしもがな
(後拾遺集卷十三、恋三、若_三、伊勢の斎宮わたりよりまかり
上りて侍りける人に忍びて通ひける事をおほやけもきこし
めしてまもりめなどつけさせ給ひて忍びにも通はずなりに
ければよみ侍りける 左京大夫道雅) 〔紫〕〔休〕今はさは、
〔河〕〔細〕〔孟〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔対〕〔大〕〔集〕

②いかにしてかく思ふてふことをだに人伝ならで君に語らむ
(後撰集卷十、恋三、六三、忍びてみくしげ殿のべたうにあ

ひかたらふと聞きて父の左大臣のせいし侍りければ 敦忠
朝臣・大和物語、三〇) 〔拾〕〔新〕〔余〕

18 心づからのとのたまひすさぶるを (孟_下・262)

①かけて云へば涙の川のせを早み心づからや又は泣かれむ
(伊勢集、一八三・古今六帖第四、涙川、三_孟、〔釈前〕〔奥〕

〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕またもなかれん、〔釈書〕なみ吹く風の
しほはやみ…又もなかれん (岷)かけていづる

②恋しきも心づからのわざなればおきどころなくもてぞ煩
ふ (中務集、三九六) 〔河〕、〔一〕恋しきは…わざなれど、

〔細〕、〔休〕恋しきは、〔紹〕〔屋〕〔湖〕〔拾〕恋しきも、〔孟〕
〔岷〕〔引〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

③春風は花のあたりをよきてふけ心づからや移るふとみむ
(古今集卷三、春下、三、春宮のたち花の陣にて桜の花のち
るをよめる 藤原好風・古今六帖第一、春の風、三_孟、藤

原好風) 〔河〕〔孟〕〔岷〕

19 いとかくよのためしになりぬべきありさまもらし給なよ (孟_下・263)

恋ひわびて死ぬてふ事はまだなきを世のためしにもなりぬ
べき哉 (後撰集卷十四、恋六、一〇三、つれなく侍りける人に
忠岑) 〔拾〕〔余〕

20 ゆめくいさらがはなどもなれくしやとて (孟_下・263)

①大上のとこの山なるなとり川いさと答へよわが名もらすな
(古今集墨滅歌、卷十三、二〇八・古今六帖第五、三_孟、名を
惜む、あめのみかど、「大上や…いさく川いさと答へて」・

万葉集卷十、三三〇、「鳥籠とりかごの山にあるいさや川いさやがは不知しらとを聞
こせわが名告らすな」〔紫〕〔河〕〔湖〕〔全〕いさら川い
さとこたへて、〔一〕いさとこたへて、〔休〕いさら川いさ
とこたへてなき名もらすな、〔紹〕〔孟〕〔新〕いさら川、
〔全〕〔対〕〔事〕〔天〕〔評〕〔集〕

②たまさかにゆきあふみなるいさら川いさと答へてわが名も
らすな〔未詳〕 〔釈前〕いさらかい、〔釈書〕いさとこたへ
よ、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕、〔帳〕かりそめに〔初句〕い
さや川、〔引〕〔事〕

③我が門のいさゝ小川の真清水のましてぞ思ふ君ひとりをは
〔古今六帖第五、わきて思ふ、三三四七〕 〔屋〕〔第三四五句ノミ〕
としごろしづみつるつみうしなうばかり御おこなひをとほ
〔三三二・263〕

思へども思むとていはぬ事なればそなたをむきて音をのみ
ぞなく〔詞花集卷十、雑下、四六六、加茂のいつきときこえけ
る時に西にむかひてよめる 選子内親王〕 〔帳〕
22 女きみはたはぶれにくくのみおほす 〔三三三・264〕

ありぬやと試みがてら逢ひ見ねば戯れにくきままでぞ恋しき
〔古今集卷十、雑体、誹諧、一〇三三、題しらず 読人しらず〕
〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔帳〕〔湖〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕
〔集〕

23 いといたくわかび給へるはたがならはしきこえたるぞとて
〔三三三・265〕
いつはりをたれならはして限りなき我がまことをもつたが

はすらむ〔信明集、三三三〇、又をとこ〕 〔余〕
24 ときくにつけても人の心をうつすめる花もみぢのさかりよ
りも 〔三三四三・266〕

春秋におもひ乱れてわきかねつ時につけつづつうつる心は
〔拾遺集卷六、雑下、五〇九、ある所に春秋いづれかまさると
とはせ給ひけるによみて奉りける 貫之・貫之集、二〇三七、
ある所に春と秋といづれか優れると問はせ給ひけるに詠み
て奉りける〕 〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕、〔帳〕わきかぬる、〔事〕
〔集〕

25 花もみぢのさかりよりも冬の夜のすめる月にゆきのひかりあ
ひたる空こそ 〔三三四四・266〕

いざかくてをり明かしてむ冬の月春の花にもおとらざりけ
り〔拾遺集卷七、雑秋、二四六、高岳相如が家に冬の夜の月
おもしろう侍りける夜まかりて 元輔・元輔集、一三三六、
すけゆきが家に冬の月の面白きにまかりて侍りしに〕
〔河〕、〔休〕起きあかしてん：花の色にも、〔紹〕〔湖〕起き
あかしてん、〔孟〕〔屋〕〔帳〕〔引〕〔事〕〔評〕〔集〕

26 すさまじきためしにいひをきけむ人の心あささよとてみすま
きあげさせ給ふ月は 〔三三四六・266〕

春を待つ冬のかぎりと思ふにはかの月しもぞあはれなりけ
る〔纂物語、師走のもちころ、月いとあかきに、物語しけ
るぞ人見て、「誰ぞ。あな、すさまじ。師走の月夜ともあ
るかな」と言ひければ〕 〔河〕この月しもぞ、〔休〕〔紹〕、
〔孟〕春はまつ、〔帳〕〔湖〕

27 ひととせ中官のおまへにゆきのやまつくられたりしよにふりたる事なれど (五五1・267)

ここにのみめつらしと見る雪の山所々にふりにけるかな
〔枕草子、三三三〕〔河〕〔引〕〔新〕

28 さらへどむらさきのゆへこよなからずものし給ふめれど (五五10・267)

① 知らねどもむさし野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ (古今六帖第五、むらさき、三三三) 〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

② 紫のひとつもと故にむさし野の草はみながら哀れとぞ見る (古今集卷七、雑上、六六、題しらず、読人しらず・古今六帖第五、むらさき、三三三) 〔評〕〔集〕

29 こほりとちいしまの水はゆきなやみ空すむ月のかげぞながるゝ (五五14・269)

天の川冬は氷にとぢたれや石間にたぎつ音だにもせぬ (後撰集卷六、冬、四九、題しらず、読人しらず) 〔拾〕、〔新〕
なみは氷に…音づれもせぬ、〔余〕

30 いみじくうらみ給へる御けしきにてもらさじとのたまひしかどうきなのかくれなかりければはづかしう (五五七6・269)

大上のとこの山なるなとり川いさと答へよ我名もらすな (古今集卷三、東歌、二〇八・古今六帖第五、名を惜む、三三三) 〔犬上や…いさゝ川いさと答へて〕・万葉集卷十、三三〇〔異〕⑦ たまきかに行あふみなるいさゝ河いさとこたへて、⑧ いぬかみや…いさゝ河いさとこたへて

31 あみだぼとけを心にかけてねんじたてまつり給おなじはちすにこそは (五五八6・270)

一度も南無阿弥佗仏といふ人の蓮の上へのぼらぬはなし (拾遺集卷三、哀傷、一四四、市門にかきつけて侍りける空也上人) 〔唄〕

32 なき人をしたふ心にまかせてもかげみぬみつのせにやまどはむ (五五八8・270)

みつせ川渡るみぎをもなかりけり何に衣をぬぎてかくらん (拾遺集卷六、雑下、四三、地獄のかた書きたるを見て菅原道雅女) 〔弄〕

少女

1 ふちてろもきしはきのふと思ふまにけふはみそぎのせにかはる世を (六三九・273)

①あすか川淵にもあらぬ我が宿もせに変わりゆくものにぞありける (古今集卷六、雑下、六九〇、家をうりてよめる 伊勢・伊勢集、一三三三、家を人のになして) (河)、(花)ふちには

あらぬ、(細)(絶)(孟)(峴)(湖)(新)(全)(対)(事)(大)(評)(集)

(評)(集)

②世の中は何か常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる (古今集卷十六、雑下、六三三、題しらず 読人しらず) (全)(事)(評)(集)

(事)(評)(集)

2 はかなくとはかりあるをれいの御めとめ給て (六三九・273)

はかなくて世にふるよりは山しなの宮の草木とならましものを (後撰集卷三、哀傷、二三〇、先帝おはしまさで世中を

思ひなげきてつかはしける 三条右大臣・兼輔集、一三三三、先帝かくれさせ給ひて三条のおととにまたすければ、おとと) (紫)(異)

(紫)(異)

3 いへよりほかにもとめたるそうぞくどものうちあはずかたくなしきすがたなどを (六三九・278)

①今年行く新島守が麻衣肩のまよひは誰か取り見む (万葉集卷七、一三三三・古今六帖第五、あさごろも、三三六) (河)新崎

守か

②人妻と何かそを云はむしからばか隣の衣を借りて著なはも (万葉集卷十四、三三三、柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ) (拾)

4 なりたかしなりやまむはなはたひさう也ぎをひきてたちたうびなんなどをとしいふ (六〇一三・279)

鳴り高しや 鳴り高し 大宮近くて 鳴り高し あはれの

鳴り高し 音なせそや 密かなれ 大宮近くて 鳴り高し

あはれの 鳴り高し あな喧(かま) 子供や 密かなれ 大宮近くて 鳴り高し

あはれの 鳴り高し (風俗歌、鳴り高し、三) (紫)(異)(河)(二) (細)(休)(孟)(峴)(湖)(大)(集)

(集)

5 しぐれうちしておぎのうは風もたならぬ夕ぐれに (六三九・286)

秋はなほ夕まぐれこそたならね秋の上風秋の下露 (藤原

義孝集、二四四四、秋の夕暮・和漢朗詠集卷上、秋、秋興、三六

義孝少将) (釈前)(奥)(紫)(異)(河)(休)(絶)秋はたゞ、

(孟)(峴)(湖)(引)(全)(対)(事)(大)(評)(集)

6 はうしおどろくしからずうちならし給てはきが花すりなどうたひ給 (六〇五・290)

更衣せむや さきむだちや 我が衣は 野原篠原 萩の花 摺や さきむだちや (催馬楽 更衣、三) (釈前)己呂毛

加戸世牟也左支牟多知和波奈須利也左支牟多知也、(奥)

己呂毛加戸世牟也左支牟多知和加支奴波乃波良之乃波良

波支乃波奈須利也左支牟多知也、(紫)(異)(花)(二)(休)

(絶)(孟)(峴)(湖)(引)(新)(全)(対)(事)(大)(集)

(絶)(孟)(峴)(湖)(引)(新)(全)(対)(事)(大)(集)

7 ものげなき程を心のやみにまどひていそぎものせんとは(六六) 1・294

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな
(後撰集卷十、雜一、二〇三、太政大臣の左大将にてすまひの
かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ
れかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人はかりと々
めてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のう
へなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第二、親、
三三三、「迷ひぬるかな」大和物語、三二・兼輔集、一六六、
子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言(評)(集)
8 御心のうちをみせてまつりたらばましていかにうらみきこ
え給はん(六六六・297)

人しれぬ心のうちを見せたらば今までつらき人はあらじな
(拾遺集卷十、恋一、空三、題しらず 読人しらず) (拾)
9 雲井のかりも我ごとやとひとりごち給ふけはひ(六六九・298)
霧ふかき雲井の雁もわがごとやはれせずもの悲しかるら
む(未詳) (釈前)霧ふかく…はれせずものは、(釈書)はれ
せず物と思ふなるらん、(奥)(紫)(異)(河)(一)、(細)は
れせぬ物の、(休)(細)(五)(五)(湖)(引)(拾)(全)(対)
(事)(大)(集)

10 身にしみけるかなとおもひつゞけて(六六一・299)
①おほかたのあきのさがとは知りながら萩吹く風はまつは身
にしむ(未詳) (釈前)、(紫)(異)萩吹く風ぞ、(河)萩吹く
風ぞ、(五)(五)(帳)

②吹きくれば身にしみける秋風を色なきものと思ひけるか
な(古今六帖第一、秋の風、三三〇・統古今集卷四、秋上、
三〇) (異)(河)(弄)(一)(細)(休)(紹)(五)(五)(屋)(湖)
(引)吹きよれば、(新)(全)(対)(事)(評)(集)
11 世の中うらめしければあはれもすこしまむる心地して(六六三)
12・305

世の中はいかに苦しと思ふらむこゝらの人に恨みらるれば
(古今集卷十、雜体、誹諧、二〇三、題しらず 在原元方)
(紫)
12 いろく身にうきほどのしらるゝはいかにそめける中のこ
ろもぞ(六六四・306)

①つらからぬ中にあるこそうとしといへへだて果てし衣に
やはあらぬ(後撰集卷十、恋三、七三、かれ方になりける
男の許に装束調じて送れりけるにかゝるから疎き心地なむ
するといへりければ 小野遠興がむすめ) (拾)うしといへ
②衣だに中にありしはうとかりき逢はぬ夜をさへ隔てつる哉
(拾遺集卷十、恋三、七六、題しらず 読人しらず) (拾)
③とし月も衣も中には多しとも心ばかりはへだてざらなむ
(宇津保物語、あて宮) (拾)

13 みちのほど人やりならず思ひつゞくるに(六六九・
306)
人遣の道ならなくに大方はいきうしといひていざ帰りなむ
(古今集卷八、離別、三六、山さきより神なびの森まで送り
に人々まかりて帰りがてにして別れ惜みけるによめる 源

さね〔河〕〔岷〕

14 すぎにしとし五節などとまれりしが〔六七一・306〕

をとめとも乙女さびずもから玉をたもとにまきて乙女さびずも〔未詳〕

〔河〕平度綿度茂巖度綿左備須毛可良多万乎多

〔引〕

15 あめにますとよをかひめのみや人もわが心ざすしめをわする

な〔六七一・308〕

みてぐらはわがにはあらず天にます豊岡姫のみやのみてぐら〔拾遺集卷六、神楽歌、吾吾〕

〔休〕〔紹〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔集〕

16 おとめこが袖ふる山のみづがきのとのたまふぞ〔六七一・308〕

〔集〕

少女子が袖ふる山の端垣の久しき世よりおもひそめてき〔拾遺集卷六、雑恋、二三〇〕

帖第五、としへていふ、三三三、人麿・万葉集卷四、吾、柿

本朝臣人麿、「をとめらが…久しき時ゆ思ひけりわれは」同

卷二、二四三、「少女らが…久しき時ゆ思ひけりわれは」

〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔業〕〔異〕〔河〕〔花〕〔上句ノミ〕〔一〕

〔細〕〔第四句ノミ〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕ひれふる山の、〔岷〕

〔湖〕、〔新〕久しきときゆ思ひきわれは、〔全〕〔対〕〔事〕

〔大〕〔集〕

17 おとめ子も神さびぬらしあまつ袖ふるき世のともよはひへぬれば〔六六二・309〕

少女子が袖ふる山の端垣の久しき世よりおもひ初めてき

〔拾遺集卷六、雑恋、二三〇〕

帖第五、としへていふ、三三三、人麿・万葉集卷四、吾、柿

本朝臣人麿、「をとめらが…久しき時ゆ思ひきわれは」同

卷二、二四三、「少女らが…久しき時ゆ思ひけりわれは」

〔孟〕〔岷〕〔上句ノミ〕

8 あふみのはからさきのはらへつのかみはなにはといどもてまかでぬ〔六六二・310〕

①みそぎするけふ唐崎におろす網は神のうけひく験なりけり

〔拾遺集卷六、神楽、吾吾、粟田右大臣の家の障子に唐崎に

破したる所に網ひくかたかける所 平祐拳〕〔河〕〔孟〕〔岷〕

をく網は

②時鳥ねぐらながらのこゑきけばくさの枕ぞ露けかりける

〔拾遺集卷六、別、三三三、難波にはらへし侍りてまかり帰り

けるあかつきにもりの侍りけるに時鳥のなき侍りけるを聞き

きて 伊勢・伊勢集、一六六六〕〔河〕〔孟〕〔岷〕

19 はまゆふばかりのへだてさしかくしつゝ〔七〇七・314〕

み熊野の浦の浜ゆふ百へなる心は思へどただに逢はぬかも

〔拾遺集卷六、恋、三三六〕

帖第三、はまゆふ、三三六、人麿・柿本集、一三三三、万葉集卷

四、四六六、柿本朝臣人麿、「百重なす心は思へど」〔業〕こ

ろは思へど、〔異〕いくかさねへだて、おもふ心そは君、

〔河〕〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

20 大宮のかたちことにおはしませとまたいときよらにおはし

(古) 8・314

鏡山きみが影もやそひたると見ればかたちはことぞありける (多武峯少将物語) (河) (孟) (峴)

21 かぎりなきかけにはおなじことゝたのみきこゆれど (古) 1・316

限りなき君がためにと折る花は時しもわかぬ物にぞありける (古今集卷七、雑上、六六、題しらず 読人しらず・古今六帖第五、かたみ、三六四、「君が形見と」) (湖) (上旬) (新)

22 うぐむすのさえづるこゑはむかしにてむつれし花のかけぞかはれる (古) 12・318

鶯の鳴くなる声は昔にてわが身一つのあらずもあるかな (後撰集卷三、春下、二、贈太政大臣祖わかれて後ある所にてその声を聞きてつかはしける 藤原顯忠朝臣母) (河) (休) (孟) (峴)

23 あなたうとあそびて (古) 10・318

あな尊 今日いひよの尊とさ や 昔も はれ 昔も かくやありけむ や 今日いひよの尊さ あはれ そこよしや 今日いひよの尊さ (催馬楽、あな尊と、二云) (釈前安名尊介不之多不と左也伊余之戸毛波礼伊所之戸毛加久也安利介牟也介不之多不と左也安波礼曾己与之也介不之多不と左也、(奥)安名多不介不之多不左也伊仁之戸毛波礼伊耳之戸毛加久也安利介牟也介不之多不左也安波礼曾己与之や介不之多不左や、▲紫V(異)(河)▲一V(休)(紹)(孟)(峴)

▲湖V(引)(全)(対)(大)(評)(集)

24 つぎにさくら人月おぼろにさしいでゝをかしきほどに (古) 10・318

桜人 その船止め 鳥つ田を 十町つくれる 見て帰り来むや そよや 明日あした帰かへりこむ そよや 言をこそ 明日あしたともいはめ 遠方に 妻さる夫は 明日あしたもさね来じや そよや さ明日もさね来じや そよや (催馬楽、桜人、二云)

25 とりかへさまほしうよろづおほしむつかりける (古) 13・320

久礼留見天可戸利之戸平曾於与於也己と牟己曾須と毛以波女乎牟可左余川末左留世那波安春毛左禰之世曾与也、▲紫V(異)▲河V▲一V(紹)▲峴V(事)(全)(説) 思はむ(未詳) (休) (第二句ノミ)

26 むかしおほゆる花たちはななでしこさうびくだになどやうの花くさくをうへて (古) 11・323

さつきまつはな橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする (古今集卷三、夏、二云、題しらず 読人しらず・古今六帖第六、橘、三六六、いせ・伊勢物語、二番・和漢朗詠集卷上、夏、花橘、一三三) (湖) (第二句ノミ)、(全)(対)(事)(評)(集) 27 このふたにいろいろの花もみちをこきませてこなたにたてまつらせ給へり (古) 4・324

見わたせば柳さくらをこきませて都ぞ春のにしきなりける (古今集卷一、春上、異、花さかりに京を見やりてよめる、

素性法師・素性法師集、二五〇五・古今六帖第三、都、三〇〇五、
素性・和漢朗詠集卷下、眺望、三〇〇〔評〕

玉鬘

28
風にちる紅葉はかろし春の色をいはねの松にかけてこそみめ
このいはねのまつもこまかにみればえならぬつくりごとく
もなりけり(七二一三・325)

①大方の秋に心はよせしかど花みる比はいづれともなし(拾遺集卷六、雑下、三〇〇)元良のみこ承香殿のとし子に春秋いづれかまさるととひ侍りけれ秋もをかしう侍りといひければおもしろきさくらをこれはいかゞといひて侍りければ)

〔河〕、〔孟〕花みるときは、〔岷〕

②かゝる秋を君にまかせて我はたゞのどけき春をまつぞくるしき(未詳)〔河〕〔孟〕〔岷〕

③さく花も人の心も長閑なる春としりせば春をまたまし(未詳)〔河〕〔孟〕〔岷〕

1
あらましかばとおはれにくちおしくのみおほしいづ(三二九二・329)

①世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな(拾遺集卷三、哀傷、三九六、むかし見侍りし人々多くなくなりたることを歎くを見侍りて 藤原為頼・為頼朝臣集、二四三三、小野の宮の御日に法住寺に参るとて同じ程の人の多く参りしを思ひいで、前大納言公任卿集、三三〇六、又の年法さう寺の御八講の日 為頼・和漢朗詠集卷下、懐旧、三三〇、「なきはおほくも」(釈前)なきはおほくも、

〔奥〕〔卷〕〔異〕〔河〕〔休〕、△紹▽引歌不及、〔孟〕〔此歌しみて不用之〕、〔屢〕〔岷〕〔引〕〔新〕〔事〕〔大〕〔集〕

②春日野の若紫のすりごろもしのおのみだれ限り知られず(伊勢物語、一六・新古今集卷七、恋三、九四、女に遣しける在原業平朝臣・業平集、二六四、古今六帖第五、すり衣、三二五)〔河〕〔孟〕〔岷〕

2
ふかき御心ざしなかりけるをだにおとしあふさずとりしたゝめ給ふ(三二九二・329)

身は捨てつ心をだにもはふらさじ終には如何なると知るべく(古今集卷六、雑体、二〇四、題しらず 興風・興風集、一六三五、「なると見るべく」・古今六帖第五、雑の思、三〇〇五、興風)〔新〕(上句ノミ)

3 いまさらにかひなき事によりて我名もらすなくちがため給しを(三九1・329)

いぬかみのとこの山なるいざら川いさと答へよわが名もらすな(古今集墨滅歌、卷三、二〇六・古今六帖第五、名を惜む、三三〇号、あめのみかど・万葉集卷十、三三〇)〔紫〕いさ

とこたへて、〔異〕いぬかみやとこのうらなるいさ、河いさとこたへて、〔河〕〔休〕〔孟〕〔屋〕〔帳〕〔湖〕いざや川いさとこたへて、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔二〕〔第二句ノミ〕、〔細〕〔絶〕

4 おはせましければわれらはくたざらましと京のかたを思やらるゝに(三〇13・331)

神無月時雨ふるにもくるゝ日を君待つ程は長しとぞ思ふ(後撰集卷八、冬、四三)親のほかにまかりて遅くかへりければ遣はしける 人の娘の八つなりける(〔細〕、〔絶〕時雨降る日の暮る間は君まつ程に、〔帳〕〔湖〕

5 京のかたを思やらるゝにかへるなみもうらやましく心ばそまに(三〇14・331)

いとしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくも返る波かな(後撰集卷十、霧旅、三三)東へ罷りけるにすぎぬる方恋しく覚えける程に川を渡りけるに浪の立ちけるを見て 業平朝臣・伊勢物語、三三)〔釈前〕さらぬだにすぎにしか

たの、〔紫〕〔異〕〔河〕、〔二〕〔第二句ノミ〕、〔休〕〔孟〕〔屋〕〔帳〕〔引〕、〔新〕〔第二句ノミ〕、〔過にしかたの〕、〔全〕

〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

6 あら／＼しきこゑにてうらがなしくもとをきけるかなと うたふを(三二1・331)

浅茅原たままく葛のうら風のうら悲しかる秋は来にけり(後拾遺集卷四、秋上、三三)秋たつ日よめる 惠慶法師)〔花〕、△細▽〔引歌に及べからず〕、〔孟〕〔帳〕

7 こしかたもゆくゑもしらぬおきにいぞあはれいづくに君をこふらん(三二4・331)

我死なばいづこをばかと尋ねてかこの世に尽きぬことも語らむ(小大君集、二六四)返しなるべし(〔異〕

8 ひなのわかれにをのがじく心をやりていびける(三二4・331)

思ひきやひなの別れにおとろへて海人の縄たぎいさりせむとは(古今集卷六、雑下、九六)隠岐の国に流されて侍りける時によめる 篁朝臣・古今六帖第四、別、三三〇)たかむら、〔あまのなはたく〕〔釈前〕〔紫〕〔河〕、〔二〕〔上句ノミ〕、〔休〕〔絶〕〔孟〕〔帳〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

9 かねのみさきすぎてわれはわすれずなどよとものことごとくになりて(三二5・331)

①ちはやぶる金の御崎を過ぎぬともわれは忘れじしかのすめ神(万葉集卷五、三三〇)〔紫〕かねがみさきをすぐるにも我はわすれずしかのすへがみ、〔異〕、〔河〕〔休〕〔孟〕〔帳〕〔引〕〔新〕すぐれども我は忘れずしかのすへ神、△弄▽、〔二〕我は忘れずしかのすへ神、〔細〕すぐれども、〔絶〕我は忘れず、〔帳〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

②つくしなるかねの御崎に波立てば人のつらさぞ思ひ知らる
〔未詳〕 〔河〕〔孟〕〔岷〕〔引〕

10 ことなるいきをいなき人はたゆたいつゝすがくしくもいで
たぬほどに〔三二一・332〕

いで我を人なとがめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふころぞ
〔古今集卷二、恋一、五〇〕、題しらず 読人しらず・古今六
帖第三、舟、三六五〔異〕ゆたのたゆたとおもふ心ぞ

11 よをいとうきものにおほして年三などし給〔三三〇・334〕

百年にやそとせそへていのりける玉の験を君みざらめや
〔後撰集卷十、賀、三三三〕、年屋おこなふとて女檀越のもと
よりずをかりて侍りければ加へてつかはしける 惟済法
師 〔紫〕〔河〕〔孟〕いのりくる、〔湖〕〔玉〕〔大〕

12 いかりなばせぬ事どもして心といひをどせば〔三四〇・335〕
※事とも一わざくも河

人も見ぬ所に昔君とわがせぬわざくをせしぞこひしき
〔拾遺集卷六、雑賀、二〇七〕、題しらず 源公忠朝臣 〔花〕、

〔休〕せぬわざくも、〔孟〕〔岷〕〔余〕

13 おかしくかきたりと思たることばぞいとだみたりける〔三三
二・336〕

あつまにて養はれたる人の子は舌だみてこそものは言ひけ
れ〔拾遺集卷七、物名、四三〕、しただみ 読人しらず 〔異〕
物はいひけり、〔河〕〔細〕〔下句ノミ〕、「物はいふなれ」、
〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔事〕〔集〕

14 さまかへたる春の夕暮なり秋ならねどもあやしかりけりとみ

ゆ〔三三三・338〕

いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかり
けり〔古今集卷二、恋一、五〇〕、題しらず 読人しらず・小
町集、一六六、「あやしかりけり秋の夕暮」〔釈前〕あらね

どもあやしかりけり秋の夕暮、〔奥〕〔紫〕〔異〕なけれど
もあやしかりけり秋の夕暮、〔河〕あやしかりけり秋の夕
暮〔真本秋の夕はあやしかりけり、八弄〕、〔細〕〔第五句ノミ〕、〔休〕

〔絶〕〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔引〕秋の夕べぞあやしかりけ
る、〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

15 君にもし心たがはまつらなるかゞみの神をかけてちかはむ
〔三三六・337〕

①あひむと思ふ心は松浦なる鏡の神や空にしるらむ〔紫式
部集、三五〇〕、筑紫の肥前といふ所より文おこせるをいと
遥なる所にてみけりその返事に・新千載集卷三、恋三、二三

一、浅からず頼めたる男の心ならず肥後の国へまかりて侍
りけるが、便につけて文をおこせて侍りける返事に 紫式
部、「かけて知るらむ」〔河〕〔孟〕〔湖〕〔新〕〔大〕〔集〕

②行きめぐり逢ふを松浦の鏡には誰をかけつゝ祈るとかしの
〔紫式部集、三三九〕、かへし又の年もてきたる 〔集〕

16 まつらの宮のまへのなぎさとかのあねおもとのわかるゝをな
むかへりみせられて〔三六四・340〕

①を黒崎みつのご島の人ならば都のつとにいざといはましを
〔古今集卷二、東歌、二〇〇〕、〔細〕〔岷〕〔湖〕

②栗原の姉羽の松の人ならば都のつとにいざと言はましを

17 (伊勢物語、三三)〔絶〕あれはの松の、〔峴〕(上句ノシ) はや舟といひてさまことになむかまへたりければ(三六〇・340)

大島に水をはこびしはや舟の早くも人にあひ見てしがな (後撰集卷十三、恋留、三三) 女につかはしける 大江朝綱朝

18 ひびきのなだもなだらかにすぎぬ(三二二・340) 臣・古今六帖第三、昔あへる人、三三六交)〔河〕〔孟〕〔峴〕

①昨日こそ船出はせしか鯨魚取り比治奇の灘を今日見つるかも(万葉集卷十七、三九三)〔紫〕〔異〕伊佐魚とる、〔河〕伊佐魚とる、〔休〕けふみつる哉、〔絶〕いなきとる…けふみつる哉、〔孟〕伊佐魚とる…けふみゆる哉、〔峴〕伊佐魚とる…今日みつるかな

②あふ時はますみのかぐみはなるればひびきのなだに波もとゝろに(未詳)〔河〕、〔孟〕なかるればひびきのなだの、〔峴〕③年を経て響の灘に沈む舟波のよするを待つにぞありける(忠見集、二〇四)〔紫〕、さてせじ給はりて御厨子所に候ひて参らす)〔異〕、〔河〕〔孟〕〔峴〕〔湖〕しむ舟の

④音に聞きめにはまだ見ぬ播磨なるひびきの灘と聞くはまことか(忠見集、三〇七) 伊予に行きたるによしある浮れ女の云ひたる)〔異〕〔拾〕〔余〕〔集〕

⑤年ふれば朽ちこそまされ橋柱昔ながらの名だに交らで(忠見集、三三六、返し)〔拾〕〔余〕 例のふなごどもからどまりよりかはじりをすほどはとうたふこゑ(三三六・340)

韓亭能許の浦浪立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日は無し (万葉集卷十五、三三〇)〔紫〕〔異〕〔河〕、〔孟〕からとまり此浦

20 こゝろをさなくもかへりみせいでにけるかなとすこし心のとまりて(三二九・341)

①みづうみに潮たるばかりをさなくて都に年の老いにける哉(公忠集、一四七、近江の守になりて下るに貫之が許よりおこせたる歌二つ返し)〔拾〕〔余〕

21 たゞ水鳥のくがにまどへる心ちしてつれぐにならぬありさまの(三〇五・342) 人の児のかなしけ時は浜す鳥足惱む駒の愛しけくもなし(万葉集卷十四、三三三)〔拾〕

22 からうじてつばいちといふ所に(三二二・343) ①紫は灰さすものぞつばいちの八十のちまたに逢ひし児や誰(万葉集卷十三、三〇二)〔河〕、〔休〕はひさす物を、〔孟〕はひさす物を…あひしこやこれ、〔峴〕、〔拾〕〔余〕あへるこや

23 君の御事はいひいでず(三三六・346) ②つばいちの八十のちまたに立ちならし結びし紐を解かまく惜しも(万葉集卷十五、三三三)〔異〕〔拾〕〔余〕

※君の御事はいひめ君の御ことはかなきよを思ふにあへなくもやいはむとてかけむもゆゝしくて河

秋山をゆめ人かくな忘れにしそのもみち葉の思はゆるくに
〔万葉集卷十、三〇四〕〔拾〕おもほゆる君、〔余〕

24 しみづの御寺觀世音寺にまゝいり給しいきおひは〔三三〇〕・350
鳥総立て足柄山に船木伐り樹に伐り行きつあたらし船材を
〔万葉集卷三、譬喻歌、三〕、沙弥滿誓 〔花〕〔孟〕木にきり
よせん、〔休〕木にきりかへん、〔紹〕木にきりよせつ、
〔岷〕木にきりかへつ

25 いゑかまどをもすておとこをんなのたのむべきごどもにもひ
きわかれて〔三三〇〕・352
高き屋に登りてみれば煙たつたみのかまどは賑ひにけり
〔新古今集卷七、賀、七五〕、貢き物ゆるされて國とめるを御
覽して 仁徳天皇御歌・水鏡、一〇三〔河〕〔孟〕〔岷〕

26 まへより行水をははつせ川といふなりけり右近 二もとの
杉のたちどをたつねずはふる河のべに君をみましや〔三四〇〕・
354
はつせ川ふる川のべにふたもとある杉年を経てまたもあひ
みむ二本ある杉〔古今集卷六、雑体、旋頭歌、一〇〇〕、題し
らず 読入しらず・古今六帖第四、せんとう歌、三三三・躬
恒集、一四六、頭べを旋らす歌、〔年をへて二本ある杉〕おも
も変りせで〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕
〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

27 うれしきせにもときこゆ はつせ河はやくの事はしらねども
けふのあふ瀬に身さへながれぬ〔三四〇〕・354
祈りつゝ頼みぞ渡る初瀬川嬉しきせにも流れあふやと〔古

今六帖第三、川、三三四〔異〕〔河〕〔入弄〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕
〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

28 はつせ河はやくの事はしらねどもけふのあふ瀬に身さへなが
れぬ〔三四〇〕・354

①あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへ流るときかば頼まむ
〔古今集卷三、恋三、六六〕、かの女に代りてかへしによめる
業平朝臣・伊勢物語、一九七〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔新〕

②吉野川いはなみたかくゆく水の早くぞ人を思ひそめてし
〔古今集卷十、恋二、四三〕、題しらず 紀貫之・古今六帖第
三、としへていふ、三三四〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕おもひ
そめてき

③はつせ川ふる川のべにふたもとある杉年を経てまたもあひ
みむ二本ある杉〔古今集卷六、雑体、旋頭歌、一〇〇〕、題し
らず 読入しらず・古今六帖第四、せんとう歌、三三三〔事〕
〔事〕

④祈りつゝ頼みぞ渡る初瀬川嬉しきせにも流れあふやと〔古
今六帖第三、川、三三四〕〔事〕
29 かゝるしたくさたのもしくぞおぼしなりぬる〔三四〇〕・355
①柏木の森の下草老いの世にかゝる思ひはあらじとぞ思ふ
〔大和物語、四二〕、続古今集卷三、恋三、二二、返し 僧正
遍照〔業〕〔異〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔余〕

②わが屋戸の軒の子太草生ふれども恋忘れ草見れどいまだ生
ひず〔万葉集卷十、三四五〕〔河〕〔孟〕〔余〕みれどまだおひ
ず、〔岷〕

③春日野の雪の下草人知れずとふひ有りやと我ぞ待ちつる

(翁宮集、一四六、御かへし・玉璽集卷十、恋二、一四六、題し)

らす 女御徴子女王) (余)

30 まめ人のひきたがへこまがへるやうもありかし (七四一・三五五)

①朝露の消やすきわが身老いぬともまた若ちかへり君をし待

たむ (万葉集卷十二、三六六・同卷十二、三四三、「露霜の」) (河)

(休) (紹) (孟) (峴) (対) (事) またこまがへり、(引) 朝霧の

けやすき我が身…またこまがへり

②霜枯れの草のゆかりぞあはれなるこまがへりても懐けてし

がな (蜻蛉日記、二元) (河) (孟) (峴) なつかしきかな (籍

包、(拾)、(新) 名づけてしがな

31 まかでゝ七日にすぎ侍ぬれどおかしき事は侍がたくなむ

(七四二・三五六)

わが行きは七日は過ぎじ菟田彦ゆめこの花を風にな散らし

(万葉集卷六、二四六、反歌) (拾) なぬかに過し…なぬかち

らすな、(余)

32 しらずともたづねてしらむしまえにおふるみくりのすぢは

たえじを (七四八・三六〇)

①近江にかありと云ふなるみくりくる人苦しめのつくま江の

沼 (後拾遺集卷十二、恋一、六四四、女のもとにつかはしける

藤原道信朝臣) (河) あふみちか (真本あふみにか)、(休)

みくりおふる…つくま江の神、(孟) みくりおふる…みく

ま江のぬま、(峴)

②つくま江に生ふるみくりの水早みまだねも見ぬに人のこひ

しき (古今六帖第六、みくり、三三九) (河)、(休) まだね

も見えぬ、(紹) (孟) (峴) (引)

③恋すてふ狭山の池のみくりこそ引けば絶すれ我やねたゆる

(古今六帖第六、みくり、三三九) (新) (余)

33 さうじみはたゞかごとばかりにてもまことのおやの御けはひ

ならば (七五二・三六一)

東路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりもあはむとぞ思

ふ (新古今集卷十二、恋一、一〇三、題しらす 読人しらす・

古今六帖第六、おび、三三〇) (弄) (句) ノミ、(峴) <

34 京はをのつからひろき所なればいぢめなどやうのもの (百六

二・三六)

しらす浪もたつ日たゝぬ日ある物を市にいちめのたゝぬ日ぞ

なき (未詳) (花) (休) (紹) (孟) (峴)

35 をうなになるまですぎにけるをおほえぬかたよりのなむきゝつ

けたると (七四八・三六)

古りにし姫にしてやかくばかり恋に沈まむ手童のこと (万

葉集卷三、二元、石川女郎・古今六帖第三、おむな、三三三、

いしかはの郎女、「古のおむなにしてや」 (拾) (余) いに

しへの

36 あしたゝすしづみそめ侍にけるのち (七五九・三六七)

かぞいろはいかにはれと思ふらむ三年になりぬ足たたす

して (和漢朗詠集卷下、詠史、六六、日本紀竟宴和歌、「あ

はれとみずやひるのこは」 (釈前) (釈書)、「奥) かぞいろ

も、(紫) (異) (河)、「弄) (細) (第四句ノミ)、「二) (第二三四

句ノミ、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔峴〕〔湖〕、〔新〕第二句ノミ、〔全〕
〔対〕〔事〕入大〔集〕

37 ちひわたる身はそれなれど玉かつらいかなるすぢをたづねき
つらむ〔孟〕7・388

①いづくとて尋ね来つらむ玉かつら我は昔のわれならなくに
〔後撰集卷十六、雑言、三言、中将にて内にさぶらひける時に
あひしりける女くら人のさうしにつばやなくひおいかけを
宿し置きて侍りけるをにはかに事ありて遠き所にまかりけ
り、この女の許より此おいかけをおこせて哀れるることな
どいひて侍りける返事に 源善朝臣〕〔河〕〔紹〕〔孟〕〔峴〕

〔湖〕〔訂〕、〔新〕いづくとか、〔余〕〔全句〕ノミ、〔事〕〔集〕

②玉かつらかけぬ時無く恋ふれどもいかにか妹に逢ふ時も無
き〔万葉集卷三、三言四〕〔河〕なにもいかに逢ふ時もな
し、〔孟〕〔峴〕なにもいかに逢ふ時もなし

③人はいさ思ひやすらむ玉髪おも影にのみいと見えつゝ
〔伊勢物語、三、新勅撰集卷十四、恋四、三言、題しらず、読
人しらず〕〔河〕〔孟〕〔峴〕

38 あはれとやがてひとりごち給へば〔孟〕7・388

しなてるや片岡山にいひに飢ゑてふせる旅人あはれ親なし
〔拾遺集卷三、哀傷、一三言〕、聖徳太子片岡の山辺道人の家
に坐しけるに餓ゑたる人道のほとりにふせり、太子の乗り
たまへる馬とままりてゆかず、おちをあげて打ち給へどし
りへしりぞきてとどまる、太子即馬よりおりて餓ゑたる人
のもとに歩みすゝみ給ひて紫の上の御ぞをぬぎてうゑ人の

上に覆ひ給ふ、歌をよみて宣はく〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔休〕
第二句ノミ、〔孟〕〔峴〕

39 人のかたちはぞくれたるも又なをそこひある物をとて〔孟〕
4・371

①そこひなき淵やは騒ぐ山川の浅き瀬にこそあだ波はたて
〔古今集卷十四、恋四、三言、題しらず、素性法師・素性法師
集、一五七〕「上波はたて」・古今六帖第三、淵、三言六

〔河〕うは波はたて〔真本あだ波は、真本うき浪も〕、〔孟〕〔峴〕
②天地のそこひのうらに吾が如く君に恋ふらむ人はさねあら
じ〔万葉集卷十五、三言〕〔拾〕〔余〕

40 きてみればうらみられけりからごろもかへしやりてん袖をぬ
らして〔孟〕3・372

①いとせめて恋しき時はうは玉のよるの衣を返してぞぬる
〔古今集卷三、恋三、三言、題しらず、小野小町・古今六帖
第五、ころも、三二六、小町、「ぬば玉の…かへしてぞきる」・
小町集、一九六、七、「むば玉の」〕〔孟〕〔峴〕

②つれなきを思ひわびては唐衣返すにつけてうらみつるかな
〔為信集〕〔集〕

41 さかしらにもてわづらひぬべうおほす〔孟〕8・373

さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやぐ霜夜をわが独りぬ
る〔古今集卷六、雑体、俳諧、二四言、題しらず、読人しら
ず・古今六帖第一、霜月、三〇六、同第五、ひとりね、三三三
〔異〕

42 わざとあるうたよみの中にてはまどひはなれぬ〔孟〕11・373

思ふどちまじるせる夜は唐錦たゞまく惜しき物にぞありけり
(古今集卷六、雑上、八四、題しらず 読人しらず)

〔異〕〔河〕、〔玉〕から衣第三句、〔帳〕〔湖〕〔新〕

43 けさうのおかしきいどみにはあだ人といふいづもじをやすめ
どころにうちをきて (三五二・373)

あだ人もなきにはあらずありながら我が身にはまだ聞きぞ
習はぬ (後撰集卷七、雑三、二五九、女の許よりあだにきこ

ゆることなどいひて侍りければ 左大臣・清慎公集、三三

一) 〔紫〕〔河〕、〔玉〕あだ人の、〔帳〕

44 かへさむといふにつけてもかたしきのよるの衣をおもひこそ
やれ (三五二・374)

いとせめて恋しき時はうば玉のよるの衣をかへしてぞぬる

(古今集卷十三、恋三、五五、題しらず 小野小町古今六帖第

三、ころも、三五二六、小町、「ぬば玉の…かへしてぞきる」・

小町集、一五八、〔むば玉の〕〔花〕〔稻〕〔玉〕〔帳〕〔湖〕〔新〕

〔余〕〔対〕〔事〕

初 音

1 としたちかえるあしたのそらのけしきなごりなく (三五二・

377)

あらたまの年たちかへるあしたより待たるものは鶯の声
(拾遺集卷一、春、五、延喜の御時月次の屏風に 素性法師・

素性法師集、二五三、延喜の御時月なみの屏風に・古今六

帖第一、ついたちの日、素性法師、三五九、和漢朗詠集卷

上、春、鶯、三、素性) 〔河〕〔林〕〔稻〕〔玉〕〔帳〕〔拾

〔新〕〔余〕〔事〕〔評〕〔集〕

2 かずならぬかきねのうちだにゆきまの草わかやかにいろづき
はじめ (三五二・377)

野々見れば若な摘みけりむべしこそ垣ねの草も春めきにけ

り (拾遺集卷一、春、二六、恒佐右大臣の家の屏風に 貫之・

古今六帖第六、春の草、三五九、貫之、「うべしこそ垣ほの

草も春めきにけれ」・貫之集、一五九、同じ七年右大臣殿の

屏風の歌、梅の花若菜ある所女すの前に出で、見る、「う

べしこそ…春めきにけれ」 〔河〕〔林〕〔稻〕、〔玉〕〔帳〕春め

めきにけれ、〔引〕〔新〕〔事〕〔評〕〔集〕

3 ゆきまの草わかやかにいろづきはじめいつしかとけしきだつ

かすみのこのめもうちけぶり (三五二・377)

霞たちこのめも春の雪ふれば花なき里も花ぞちりける (古

今集卷一、春上、六、雪の降りけるをよめる 紀之貫・古今

六帖第一、のこりの雪、三〇七、貫之〔花〕花なき里に、

〔休〕、〔孟〕花ぞさきける、〔峴〕〔事〕

4 ましうといとたまをしける御まへは庭よりはじめみどころお
ほく〔孟〕三・377

堀江には玉敷かましを大皇を御船榜がむとかねて知りせば

〔万葉集卷十、四〇六、左大臣橘宿禰古今六帖拾遺、三三三、
井手左大臣〕〔河〕〔峴〕おほ君の、〔孟〕

5 ちとせのかけにしるまとしのうちのいはひ事どもして〔孟〕
11・377

①万代をまつにぞ君を祝ひつるちとせの影に住まむと思へば
〔古今集卷五、賀、三三六、良岑のつねなりが四十賀にむすめ
にかはりてよみ侍りける 素性法師・古今六帖第四、祝、
三三六、貫之、〕万代の松にぞ年を折りつる〔素性法師集、
一五三、良岑のつねより四十賀し侍りけるに遣しける〕

〔業〕〔河〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕
〔集〕

②近江のや鏡の山をたてたればかねてぞみゆる君が千年は
〔古今集卷三、大歌所御歌、一〇六、大伴黒主〕〔休〕〔孟〕

6 としの中のいはひ事どもしてそほれあへるに〔孟〕11・
377

〔湖〕〔新〕〔対〕〔大〕〔集〕

ぬれつゝぞ強て折りつる年の内に春はいく日もあらじと思
へば〔古今集卷三、春下、二三、やよひのつごもりの日雨の
降りけるに藤の花を折りて人に遣はしける 業平朝臣・伊

勢物語、二五〇〕〔峴〕

7 かねてぞみゆるなどこそかゞみのかけにもかたらひ侍りつれ
〔孟〕二・378

近江のや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君がちとせば
〔古今集卷三、大歌所御歌、一〇六、大伴黒主〕〔釈前〕たて

おきて、〔釈書〕あふみなる…たてみれば、〔奥〕〔業〕〔異〕
〔河〕〔花〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔峴〕〔引〕〔全〕、〔対〕
〔上句〕、〔事〕〔評〕

8 うすこほりとけぬるいけのかゞみにはよにたぐひなきかげぞ
ならへる〔孟〕八・378

①年を経て花の鏡となる水はちりかゝるをや曇るといふらん
〔古今集卷二、春上、四、水のほとりに梅の花の咲きけるを
詠める 伊勢・伊勢集、一三三、京極の院に亭子の帝おは
しまして花の宴をせさせ給ひ参れと仰せられしに参りて池
の花など散りたるを見て、古今六帖第六、花、三三六、伊勢〕

〔業〕〔異〕

②春の日の影そふ池の鏡には柳のまゆぞまづはみえける〔後
撰集卷三、春下、四、春の池のほとりにて 読人しらず〕

〔業〕〔河〕〔孟〕〔峴〕

9 今日のはねのひなりけりげにちとせの春をかけていはゝんにこ
とほりなる日なり〔孟〕11・379

①珍らしき千世の始の子日にはまづけふぞこそひくべかりけ
れ〔拾遺集卷五、賀、二六、康保三年内裏にて子日せさせ給
ひけるに殿上の男子ども和歌つかうまつりけるに 藤原の

ぶかた)〔紫〕〔花〕〔休〕〔紹〕、〔孟〕まつけふこそは、〔尾〕
〔岷〕

②桜花今宵かざしにさしながらかくて千年の春をこそへめ
〔拾遺集卷三、賀、三六、天徳三年内裏に花の宴せさせ給ひ
けるに 九条右大臣〕〔紫〕〔異〕

③新らしき年のはじめにかくしこそ千年をかねて楽しきをつ
め〔古今集卷三、大歌所御歌、二〇六、おほなほびの歌〕
〔異〕たのしきものを

④行く末も子の日の松のためしには君が千年をひかむとぞ思
ふ〔拾遺集卷三、夏、二四、小野宮の太政大臣の家にて子日
し侍りけるに下らふに侍りける時よみはべりける 三条太
政大臣廉義公〕〔河〕〔岷〕〔引〕

⑤千年まで限れる松もけふよりは君にひかれて万代やへむ
〔拾遺集卷一、春、三、入道式部卿のみこの子日し侍りける
所に 大中臣能宣〕〔花〕〔休〕〔孟〕〔岷〕

10 ひげこどもひわりごなどたてまつり給へり〔孟一・379〕

二葉より今日を松とは引かるとも久しきほどを比べても見
よ〔続後撰集卷三、賀、三三、亭子院におまし／＼ける時
いまだみこにて正月初子の日こてうして後の宮の御方に奉
らせ給ふとてかき付けさせ給ひける 延喜御製〕〔岷〕
11 えならぬ五えうのえだにうつるうぐひすもおもふ心あらんか
し〔孟一・379〕

松の上になく驚の声をこそ初ねの日とはいふべかりけれ
〔拾遺集卷一、春、三、おほきさいの宮に宮内といふ人のわ

らはになりける時醍醐の御門のお前にさぶらひける程にお
まへなる五葉に驚の鳴きければ正月初ねの日つかうまつり
ける〕〔新〕

12 とし月をまつにひかれてふる人にけふうぐひすのはつねきか
せよ〔孟一・379〕

①万代をまつにぞ君を祝ひつる千年の影に住まむと思へば
〔古今集卷七、賀、三六、良峯のつねなりが四十賀にむすめ
にかはりてよみ侍りける 素性法師・古今六帖第四、祝、
三〇六、貫之、「万代の松にぞ年を祈りつる」素性法師集、
一五三、良岑のつねより四十賀し侍りけるに遣しける〕
〔紫〕

②松の上になく驚の声をこそ初ねの日とはいふべかりけれ
〔拾遺集卷一、春、三、おほきさいの宮に宮内といふ人のわ
らはなりける時醍醐の御門のお前にさぶらひける程におま
へなる五葉に驚の鳴きければ正月初ねの日つかうまつりけ
る〕〔河〕〔入〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔事〕〔集〕

③花のいろはあかず見るとも驚のねぐらの枝に手ななふれそ
も〔拾遺集卷六、雑春、二〇六、天曆の御時合盤所のまへに
驚のすを紅梅の枝につけて立てられたりけるを見て 一条
撰政〕〔河〕〔孟〕〔岷〕

④春のたつけふ驚の初声を鳴きて誰にかまつ聞かずらむ〔躬
恒集、一五〇六、続千載集卷一、春上、六、題しらず 凡河内
躬恒、「鳴きて誰にと」〕〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

13 とし月をまつにひかれてふる人にけふうぐひすのはつねきか

せよをとせぬきとのときこへたまへるを(七六三・379)

④今日だにも初音きかせようぐひすの音せぬ里は住むかひもなし(未詳)〔釈前〕あるかひもなし(結句)。(釈書)くるしかりけり(結句)。(奥)〔紫〕〔異〕。(河)あるかひもなし、

〔二〕(休)〔超〕〔孟〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②谷の戸をとちやはてつる鶯のまつに声せて春も過ぎぬる

(前大納言公任卿集、三三三、世すさまじうて籠りみ給へるころ大殿より、春のことなり・御堂関白集、三六〇、あるやうあるべしいかなることかありけむ左衛門督のもとへ遣す、「とちや果てぬる…春の過ぎぬる」・千載集卷七、雑中、二五八、前大納言公任長谷といふ所にこもりみける時つかはしける 法性寺入道前太政大臣、「まつに音せて春のくれぬる」(眠)〔余〕まつに音せて春も過ぎぬる

③万代をまつにぞ君を祝ひつる千年の影に住まむと思へば(古今集卷七、賀、三三六、良峯のつねなりが四十賀にむすめにかはりてよみ侍りける 素性法師・古今六帖第四、祝、三〇六、貫之、「万代の松にぞ年を祈りつる」素性法師集、二五七、良峯のつねより四十賀し侍りけるに遣しける)〔異〕

14 ころろかろき人のつらにて我にそむきたまひなましかば(七六四・380)

出で去なば心かるしといひやせむ世の有様を人は知らねば(伊勢物語、三・古今六帖第四、かなしび、三三七、業平、「人は知らずて」(河)〔孟〕〔眠〕〔引〕心かるしと、(湖)〔上

句ノミ、「心かるしと」

15 めづらしやはなのねぐらにこつたひてたにのふるすをとつるうぐひす(七六四・382)

①谷の戸をとちやはてつる鶯のまつに声せて春も過ぎぬる(前大納言公任卿集、三三三、世すさまじうて籠りみ給へるころ大殿より、春のことなり・御堂関白集、三六〇、あるやうあるべしいかなることかありけむ左衛門督のもとへ遣す、「とちや果てぬる…春の過ぎぬる」・千載集卷七、雑中、二五八、前大納言公任長谷といふ所にこもりみける時つかはしける 法性寺入道前太政大臣、「まつに音せて春のくれぬる」(紫)〔異〕(河)〔孟〕

②たが里の春のたよりに鶯のかすみにとつる宿をとふらむ(紫式部集、三三三、年返りて門はあきぬやといひたるに・千載集卷六、雑上、三九、十二月ばかりに門をたゞきかねてなむ帰りにしと恨みたりける男、としかへりてかどは明きぬらむやといひて侍りければ遣はしける 上東門院紫式部)〔紫〕〔異〕

③人しれず待ちしもしるく鶯の声珍らしき春にもあるかな(兼盛集、二二〇、鶯をきくと女の家に男きたり)〔異〕(河)〔休)〔孟〕〔眠〕〔湖〕〔拾〕〔新〕、(余)第二句ノミ、〔事〕

④鶯のなくねのとかにきこゆなり花のねぐらもうごかざらん(未詳)〔異〕(河)〔孟〕〔引〕〔眠〕

⑤鶯の声まち出づる春しもぞそのうれしき事はありける(未詳)〔屋〕

⑥あら玉の年立ちかへるあしたよりまたるゝものは鶯の声

(拾遺集卷一、春、三、延喜の御時月次の御屏風に 素性法師・素性法師集、二五三・古今六帖第一、ついでたちの日、三〇九、和漢朗詠集卷上、春、鶯、五三)〔大〕〔評〕

16 さるはおかべにいゑしあればなどひきかへしなぐさめたるすぢなど (七六)五・382

梅の花咲ける岡べに家しあればともしくもあらず鶯の声 (古今六帖第六、うぐひす、三三六・万葉集卷十、二二〇)「家居

れば」〔秋前〕〔秋書〕〔異〕〔休〕ともしくもなし、〔奥〕〔紫〕〔河〕〔二〕〔細〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔帳〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔余〕〔全〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

17 まちとり給へるはたなまげやけしとおぼすべかめる (七六)14

こと夏はいかゞ鳴きけむ時鳥この宵ばかりあやしきぞなき (大鏡卷六、六四、紀貫之)〔河〕〔孟〕〔帳〕この暮ばかりあやしきはなし

18 花のかさそふゆふかせのどかにうちふきたるに (七六)11

①花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる (古今集卷二、春上、三、寛平の御時きさいの宮の歌合の歌 紀友則・古今六帖第一、のこりの雪、三九〇六、友則、「しるべにはする」・同第一、春の風、三三三三、友則・同第六、うぐひす、三三三三、ともりの・寛平御時后宮歌合、春歌、三三三三、紀友則・友則集、一五九六、寛平の御時の歌合、初春)〔河〕、

〔細〕〔湖〕〔上句ノミ〕、〔休〕梅がゝを〔初句〕、〔紹〕〔孟〕〔帳〕〔事〕〔集〕

②やま風のはなの香さそふふもとには春の霞ぞほだしなりける (後撰集卷二、春中、三、寛平の御時花の色霞にこめて

見せずといふ心をよみて奉れとおほせられければ 藤原興風・興風集、一六六四、「花のかさそふ」・古今六帖第一、霞、三三三三、「花の香にはふ」〔紫〕〔河〕〔孟〕〔帳〕〔事〕花の香さそふ

19 あはれなるたそがれどきなるに物のしらへどもおもしろく (七六)12・384 ※あはれなるたそがれどき―あはれたれどき 青慈横肖三河飯別大保

あかときのかはたれ時に島蔭をこぎにし船のたづき知らずも (万葉集卷三、三〇八四、上田の朝臣大戸)〔拾〕〔余〕

20 物のしらへどもおもしろくこのうたひたるひやうしいとはなやかなりおとゞもときどきこゑうちそへたまへるまきくさのすゑつかたいとなつかしうめでたくきこゆ (七六)12

384 この殿は 宜も 宜も富みけり 三枝の あはれ 三枝のはれ 三枝の 三つは四つばの中に 殿づくりせりや 殿づくりせりや (催馬楽、この殿は、三三)〔秋前〕この殿はむべもとひけりさきくさのみつばよつ葉に殿づくりせり、〔奥〕己乃止乃波牟戸毛―止美介利左支久左乃安波れ左支久左乃波礼左支久左乃美川波与川波乃奈可余止乃川久利あ利やとのつくりせりや、〔紫〕〔異〕〔河〕〔二〕〔休〕

〔紹〕〔至〕〔峴〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

21 さきくさのすゑつかたいたとなつかしうめでたくきこゆ (七六)

13・384)

さす草も萌えぬらんやぞ春きては若菜摘むべきふぢかたの

山 (曾丹集、三五四) 〔河〕〔峴〕〔湖〕さき草を わかなにつ

みて(二部ノミ)

22 いろをもねをもますけぢめことになんわかかれける (七〇一・

384)

花鳥の色をも昔をも徒に物うかる身はすぐすのみなり (後

撰集卷四、夏、三三、かへし 藤原雅正・貫之集、一六〇、

返し、〔色をも香をも〕すぐすなりけり) 〔紫〕〔異〕すぐ

すなりけり

23 よのうきめみえぬ山ちに思なすらへて (七〇四・384)

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなり

けれ (古今集卷十、雑下、五五、おなじ文字なき歌 物部

よしな) 〔釈前〕みえぬ山路に…つらき人こそ、〔奥〕〔紫〕、

〔異〕〔紹〕見えぬ山路に、〔河〕〔一〕〔休〕〔至〕〔峴〕〔湖〕〔引〕

〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

24 ましてたきよどみはづかしげなる御かたわらめなどを

(七〇五・385)

①落ちたぎつ滴の水上年積り老いにけらしな黒き筋なし (古

今集卷十七、雑上、五三、ひえの山なるおとはの滝を見てよ

める 忠岑) 〔紫〕〔異〕、〔河〕くろきすぢなき 真奈なし、

〔花〕、〔細〕〔第二句ノミ〕、〔休〕〔紹〕、〔至〕くろきすぢな

し、〔屢〕〔峴〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕

②滝つせの中にも淀はありてふをなど我が恋の淵瀬ともなき

(古今集卷十、恋、四四、題しらす 読人しらす) 〔河〕

〔至〕〔峴〕

25 御はなのいろばかりかすみにもまぎるまじくはなやかなるに

(七二二・385)

浅緑野への霞はつゝめどもこぼれて匂ふはなざくらかな

(拾遺集卷一、春、四、菅家万葉集の中 読人しらす・古今

六帖第五、みどり、三五〇・寛平御時后官歌合、三五三) 〔拾

〔新〕〔事〕〔評〕

26 山ぶしのみしろ衣にゆづり給てあへなん (七三二・386)

①山里の草葉の露はしげからむみのしろ衣ぬはずともきよ

(後撰集卷六、羈旅、一三五、中原宗興が美濃国へまかり下

り侍りける道に女の家に宿りていひつきてさりがたく覚え

ければ二三日侍りてやむごとなき事によりてまかり立ちけ

ればきぬを包みてそれが上にかきて送り侍りける 中原宗

興) 〔釈前〕山里は草葉の露も…たえずさえきよ、〔紫〕〔異〕

〔峴〕〔湖〕山里は草葉の露も…たえずともきよ、〔河〕草葉

の露も…たえずともきよ、〔休〕〔紹〕山里は草葉の露も、

〔至〕山里は草葉の露も…たえずともきん、〔新〕たえずと

もきよ

②山伏ものおしもかくて心みつ今はとねりのねやぞ床しき

(拾遺集卷六、雑下、三六、返し 健守法師) 〔河〕〔至〕〔峴〕

③ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりと驚かれぬる

〔後撰集卷一〕、春上、一、元日に二条のきさいの宮にて白き大袿を給はりて、藤原敏行朝臣・敏行集、一〇六、正月一日二条中宮にして白きおほんうちきを給はりて〔河〕〔至〕

〔賦〕

27 いたはりなきしろたへのころもはなへにもなごかゝねたまはぬ〔七三・一・386〕

① ひな鶴のしろたへごろも今日よりは千年のあきにたちやかさねむ〔古今六帖拾遺、三三六、枇杷皇太后・新千載集卷三、慶賀、三三六、小野皇太后宮生れ給ひける七夜に衣ばこに添へて遣しける、枇杷皇太后宮〕〔異〕〔河〕、〔孟〕干と

せの袖をうちもかさねん、〔賦〕

② あまたには縫ひ重ねゝど唐衣思ふ心はちへにぞありける〔拾遺集卷六、別、三三、橘公頼帥になりてまかり下りける

時利貞が継母内侍のすけのうまのはなむけし侍りけるにさうぞくにそへて遣はしける、貫之〕〔異〕〔孟〕なへには

〔初句〕…人しれず〔第三句〕、〔河〕〔休〕なへには、〔賦〕なへにはぬぎかさねゝど人しれず、〔引〕

③ 小竹が葉のさやく霜夜に七重かる衣に益せる子ろがはだはも〔万葉集卷三、四三、防人の歌〕〔拾〕〔新〕

28 こうばいのささいでたるにほひなどみはやす人もなきを〔七三・一・386〕

山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそわれ見はやさむ〔古今集卷一、春上、吾、題しらず、読人しらず〕〔拾〕〔新〕

〔余〕

29 松がうらしまをはるかに思てぞやみぬべかりける〔七三・14・387〕

音にきく松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり

〔後撰集卷十五、雜一、一〇四、西院の後おほんぐしおろさせ給

ひておこなはせ給ひける時彼院の中島の松をけつりてかき

つけ侍りける・素性法師集、一吾吾、前齋院の後御ぐしお

ろして行はせ給ひける時かの院の中島の松をけつりて書き

つて侍りける、〕うへ心ある〔秋前〕〔紙書〕きてみれば

うへ心あるあまもすみけり、〔奥〕第二句ノシ、〔紫〕〔河〕

〔休〕〔絶〕きてみればむへ心ある、〕〔新〕上句ノシ、〔細〕

きてみれば…海士も住みけり、〔孟〕〔賦〕きてみれば、

〔屋〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

30 たどかぎりある道のわかれのみこそうしろめたけれ〔七三・14・389〕

かぎりある別れのみこそ悲しけれ誰も命を空に知らねば

〔未詳〕〔異〕〔河〕〔一〕〔細〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔引〕

〔拾〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

31 いのちぞしらぬなどなつかしくの給〔七三・14・388〕

長らへむ命もしらぬ忘れじと思ふ心は身にそはりつゝ、〔信

明集、二〇四、かへし〕〔河〕ながらへば命ぞ知らぬわかれ

じと〔真本志〕…つきそはりつゝ、〔休〕〔絶〕ながらへば

命ぞしらぬ、〔孟〕〔賦〕〔引〕〔湖〕〔拾〕〔新〕ながらへば命ぞ

しらぬ…つきそはりつゝ、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

32 夜もやう／＼あけゆけばみづむまやにてこそがせ給へきを

(七五)13・389)

鈴が音の早馬はやまうまやのつつみ井の水をたまへな妹がただ手
よ(万葉集卷十函、三三三)〔拾〕妹がたゞ手ゆ

33 たけがはうたひてかよれるすがたなつかしきこゑく(七五)
5・390

竹河の 橋のつめなるや 橋のつめなるや 花園に は
れ 花園に 我をば放てや 我をば放てや 少女めがしな伴へて

(催馬楽、竹河、三)〔釈前〕多介加波之川女奈留也波衣乃

川女奈留也波奈乃耳波礼名曾乃余和礼乎波礼波奈天和

乎波く名天也女左之多久天、〔奥〕多介加波乃波之乃川女

奈留也波之乃川女なるや波奈そ乃耳はれはなそのに和礼

乎波波名天也和礼乎波く奈天也女左之多久戸天、〔紫

〔異〕〔河〕〔一〕△細▽〔休〕△紹▽〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕△余▽

〔尅〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

34 御方くいづれもくおとらぬ袖ぐちどもこほれいでたるこ
ちたさものゝいろあひなどもあけほのゝそらに春のにしきた
ちいでたるかすみのうちかこみわたさる(七五)7・390

①見渡せば柳さくらをこきませて都ぞ春のにしきなりける

(古今集卷一、春上、五、花さかりに京を見やりてよめる

素性法師・素性法師集、二五〇五・古今六帖第三、都、三〇三

素性・和漢朗詠集卷下、眺望、空、素性) 〔休〕〔第二句

ノミ〕〔紹〕〔新〕〔全〕〔尅〕〔事〕〔評〕〔集〕

②やま桜霞のまよりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ
(古今集卷一、恋一、四六、人の花つみしける所にまかりて

そこなりける人のもとに後によみてつかはしける 貫之

〔新〕

胡蝶

1 花の色とりのこゑほかのさとはまだふりぬにやとめつらし
う(六)2・395

都にて珍らしとみる初雪は吉野の山に降りやしぬらむ(拾遺集卷四、冬、二四)初雪をよめる 源景明(一余)

2 ほかにほさかりすぎたるさくらもいまさかりにはおえみ(古二五・395)

見る人もなき山里の桜花ほかのちりなむのちぞさかまし(古今集卷一、春上、六、亭子院の歌合の時よめる 伊勢・伊勢集、一六三六・古今六帖第六、さくら、三三三〇、いせ)

〔弄〕(一)〔第四句ノミ〕、〔紹〕、〔孟〕とふ人も

3 みつとりどものつがひをはなれずあそびつゝほそきえだどもをくひてとびちがふ(古二八・396)

①春霞流るゝなへに青柳の枝くひ持ちて鶯鳴くも(万葉集卷十一、二二)〔拾〕、〔新〕(第三四五句ノミ)、〔余〕

②池神の力士御かも白鷺の柁啄ひ持ちて飛びわたるらむ(万葉集卷十六、三三三)〔拾〕、〔新〕(第三四五句ノミ)、〔余〕

4 をしのなみのあやにもんをまじへたるなど(古二九・396)

①水の面にあや吹き乱るはる風や池の水を今日はとくらむ(後撰集卷一、春上、二、はつ春の歌とて 紀友則・友則集、一六九七、春立つ日・古今六帖第一、水、三三三四)〔河〕今朝はとくらん、〔孟〕、〔峴〕けさやとくらん、〔湖〕引、〔対〕

(六)

②水の面にあや織り乱る春雨や山の緑をなべて染むらむ(伊勢集、一六四四・古今六帖第一、雨、三三三六・新古今集卷一、春上、空、寛平の御時きさいの宮の歌合のうた 伊勢)〔河〕〔孟〕あや吹きみだる春雨や、〔峴〕

5 まことにをのえもくたいつべうおもひつゝ(古二一〇・396)

①古郷は見しごとあらず斧の柄のくちし所ぞ恋しかりける(古今集卷十六、雄下、九六、つくしに侍りける時に罷り通ひつゝ暮うちける人の許に京に帰る詣できて遣しける 紀友則・古今六帖第三、をのゝえ、三三九六、友則・友則集、一六五三、筑紫にありける時に通ひて暮など打ちける人のもとに京へ上りて後にやりける)〔紫〕〔河〕〔孟〕〔峴〕〔事〕

②百敷は斧の柄くたす山なれや入りにし人の音つれもせぬ(後撰集卷十一、恋三、二六、内にまゐりて久しう音せざりける男に 女)〔河〕音つれもせず(真本せぬ)、〔休〕(上句ノミ)、〔紹〕〔孟〕〔引〕〔余〕

③薪こる事は昨日につきにしをいざ斧のえはここにくたさむ(拾遺集卷三十一、哀傷、一三九、為雅朝臣普門寺にて経供養し侍りて又の日これかれ諸共にかへり侍りけるついでに小野にまかりて侍りけるに花のおもしろかりければ 春宮大夫道綱母・蜻蛉日記、三三三、枕草子、四〇、「今日は斧の柄」)

〔河〕いまおのゝえは(真本いぎ)、〔孟〕〔峴〕

6 かせふけばなみの花さへ色みえてこやななたてるやまぶきのさき(古二二二・396)

①かせふけばなみの花さへ色みえてこやななたてるやまぶきのさき(古二二二・396)

②かせふけばなみの花さへ色みえてこやななたてるやまぶきのさき(古二二二・396)

③かせふけばなみの花さへ色みえてこやななたてるやまぶきのさき(古二二二・396)

①浪の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなすらん
 (古今集卷十、物名、**巽**、からさき 伊勢・伊勢集、二二三四、
 辛崎を題にて、「見えつるは河の春とも風ぞ吹きける」)
 (河)(**孟**)(**巽**)風やなるらん

②草も木も色変れどもわたつ海の波の花にぞ秋なかりける
 (古今集卷五、秋下、**三**)、是貞のみこの家の歌合の歌 文
 屋康秀・古今六帖第三、浪、**三六**、文屋朝康、「秋なかりけ
 れ」(休)

7 はるのいけやあでのかはせにかよふらんきしの山ぶきそこも
 にほへり(古113・396)

かはづ鳴く井手の山吹ちりにけり花の盛りにあはましもの
 を(古今集卷三、春下、**三**)、題しらず 読人しらず・古今
 六帖第五、今はかひなし、**三六**、「あはましものを花の盛
 りに」同第六、山吹、**三**(集)

8 はなをこきませたるにしきにおとらずみえわたる(古三六・
 397)

見渡せば柳さくらをこきませて都ぞ春のにしきなりける
 (古今集卷一、春上、**五**、花ざかりに京を見やりてよめる
 素性法師・素性法師集、**二**、**五**、古今六帖第三、都、**三**、**五**、
 素性・和漢朗詠集卷下、眺望、**三**)、素性(紫)(異)(河)

9 あなたうととあそび給ふほど(古三二・397)

あな尊と 今日の尊とさや 昔も はれ 昔も 斯くや
 ありけむや 今日の尊さ あはれ そこよしや 今日の

尊とさ(催馬楽、あな尊と、**三**) △釈前▽△異▽△河▽

△一▽△孟▽△巽▽△引(新)(全)(对)(事)(大)

10 はるのしらべひどきはいとこにまさりけるけちめを(古三
 14・397)

波の音のけさからことに聞こゆるは春の調べや改まるらむ
 (古今集卷十、物名、**巽**、からことゝいふ所にて春の立ち
 ける日よめる 安倍清行朝臣)(河)(休)(**紀**)(**孟**)(**巽**)(引)
 11 かへりごゑに喜春楽たちそひて兵部卿のみやあをやきおりか
 へしおもしろくうたひ給(古四二・397)

青柳を 片糸によりて や おけや 鶯の おけや うぐ
 ひすの ぬふといふ笠は おけや 梅の花笠や(催馬楽、
 青柳、**二** (奥)あ乎也支乎加多以止余与利て也お介也宇久
 比春のお介也宇久比春乃奴不止以不左波お介や宇女の波
 名加左や、(紫)(異)(河)(一)(休)(**紀**)(**孟**)(**巽**)(湖)(引)
 (新)(全)(对)(事)(一)(評)(集)

12 えしもうちいでぬ中の思ひにもえぬべきわかきむだちなども
 (古四九・398)

①さざれ石の中に思ひはありながらうち出づることのかたく
 もあるかな(未詳) (奥)(紫)(異)、(河)なかの思ひは…さ
 もかたき哉、(一)さもかたきかな、(休)(**紀**)、(孟)なか
 のおもひは…さもかたきかな、(屋)(**巽**)(湖)(新)(对)

(事)(一)(集)

②夏虫をなにかいひけむ心からわれも思ひにもえぬべらなり
 (古今集卷十、恋、**三**)、題しらず 躬恒・古今六帖第六、

夏虫、〔五〕、躬恒〔異〕

13 むらさきのゆへにこゝろをしめたればふちに身なげんやはおしけき〔六〕五三・399

①紫のひとつとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る〔古今集卷七、雑上、六六〕、ある人のいはく此歌はさきのおほいまうち君のなり 読人しらず〔古今六帖第五、むらさき、三四六〕、「草はなべてもなつかしきかな」〔河〕
〔休〕、〔紹〕哀れとぞ思ふ、〔五〕〔眠〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕
〔集〕

②限りなき名におふ藤の花なればそこひもしらぬ色の深さか〔後撰集卷三、春下、二五〕、三月の下の十日許に三条の右大臣兼輔の朝臣の家にまかり渡りて侍りけるに藤の花さける遣水のほとりにてかれこれ大みきたうべけるついでに 三条右大臣・兼輔集、二五三六、京極家の藤の賀弥生晦にし給ふに三条おとと、「色の深さよ」〔細〕

14 おととの君におなしかざしをまいり給〔七〕三四・399

①我が宿と頼む吉野に君し入らば同じかざしをさしこそはせめ〔後撰集卷七、恋四、二〇〕、かへし 伊勢・古今六帖第四、かざし、三三六、伊勢、「君が行かば」・伊勢集、二二二七、返し〔紫〕〔異〕〔河〕〔二〕〔休〕〔紹〕〔五〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔新〕
〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②盗人の立田の山に入りけり同じかざしの名にやけがれむ〔拾遺集卷九、雑下、五五〕、廉義公の家のかみゑに旅人の盗人にあひたるかたかける所 藤原為頼〔花〕〔休〕〔五〕〔尾〕

〔眠〕

15 御かへりきのふはねになきぬべくこそは〔七〕七二・401
わが園の梅のほづえに鶯のねに泣きぬべき恋もするかな〔古今集卷十一、恋一、四九〕、題しらず 読人しらず〔奥〕

〔紫〕、〔異〕梅のほするの、〔河〕、〔弄〕〔第二句ノミ〕、「我がやどの梅のほするに」、〔二〕〔細〕〔休〕、〔紹〕我が宿の梅のほするに、〔五〕〔眠〕、〔湖〕我が宿の、〔引〕〔新〕〔事〕
〔集〕

16 こてふにもさそはれなましこゝろありてやへ山ぶきをへだてざりせば〔七〕七四・401

名にしおへば八重山吹ぞ憂かりける隔てゝ折れる君によそへて〔古今六帖第五、物のへだてたる、三〇九〕、同第六、山吹、三四六、「きみがつらさに」〔河〕〔休〕〔紹〕〔五〕〔眠〕
〔引〕〔余〕

17 こひのやまにはくしのたうれまねびつべきけしきに〔七〕七九・403

いかばかり恋てふ山の深ければ入りと入りぬる人まどふらむ〔古今六帖第四、恋、三三三〕、〔紫〕〔異〕〔花〕〔紹〕〔五〕〔眠〕
〔湖〕〔引〕〔事〕恋の山路のしげければ、〔休〕恋の山路のしげければ…人まよふらん

18 そのつもりあぢきなかるべきぞ〔七〕七〇・404

ねぎ言をさのみ聞きけむ社こそ果ては歎きの森となるらめ〔古今集卷十、雑体、二〇五〕、題しらず さぬき〔細〕〔句〕
ノミ、〔眠〕

19 いとおいらかなればげにとおほいて (七五〇・四〇七)

中々に云ひははなたで信濃なる木曾路の橋のかけたるやなぞ (拾遺集卷十、恋四、六五、女のもとに遣はしける 源頼光) [河] (五) [岷] (岷) おいらかにいなとはいはで

20 ませのうちねおふかくうへし竹のこのをがよくにやおひわかるべき (七五二・四〇八)

① なびく方ありける物をなよ竹のよにへぬ物と思ひけるかな (後撰集卷十三、恋五、六〇、女に物いふ男ふたりありけり、ひとりに返事すと聞きて今一人が遣しける) [新] (余)

② 笛竹のものと古ねは変るとも己がよにはならずもあらなむ (後撰集卷十三、恋五、六五、右近につかはしける 左大臣) [新] (余)

21 いまさらにかならむよかわかたけのおいはじめけむねをばたづねん (七五二・四〇九)

① 幾世も有らじものから若竹の生添はりけむ春さへぞ憂き (朝忠集、一五四、返し) [異] (あらぬ物ゆへ…おひはじめけん、[河] (あらじ物ゆへ…おひかはりける (本本そはりける、

[休] (あらじ物ゆへ…思ひきりぬる、[相] (あらじ物ゆへ…おひかはりける、[五] (あらじ物ゆへ…おひそはりける、[岷] (いくよにもあらぬ物故おひそはりける)

② 今さらに何生ひ出づらむ竹の子のうき節しげきよとは知らずや (古今集卷十六、雑下、空五、ものおもひける時ときなき子を見てよめる 凡河内躬恒・古今六帖第六、たけ、

三九六、躬恒) [事]

22 たちばなのかほりしそでによそふればかはれるみともおもはえぬかな (七五六・四一〇)

さつきまつはな橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする (古今集卷三、夏、二五、題しらず 読人しらず・古今六帖第六、橋、三〇六、いせ・伊勢物語、二四、和漢朗詠集卷上、夏、

花橋、一五三) [休] (新) (余) (全) (対) (事) (大) (評) (集)

23 そでのかをよそふるからにたちばなのみさへはかなくなりもこそすれ (七五九・四一一)

① さつきまつはな橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする (古今集卷三、夏、二五、題しらず 読人しらず・古今六帖第六、橋、三〇六、いせ・伊勢物語、二四、和漢朗詠集卷上、夏、花橋、一五三) [河] (五) [岷] (湖) [事]

② 橋は実さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれましてときは木

(古今六帖第六、たちばな、三〇三、家持集、一五九、冬歌、

「枝に霜ふれどいや常葉の木」万葉集卷六、一〇〇、御製、

「枝に霜ふれどいやとこ葉の木」 [河] (枝に霜をけとまし

ときはにして (真本とましときは木、[五] (枝に霜をけとまし

ときはの木、[岷] (湖) (枝に霜をけ、[新] (余) (事) (評)

③ 薫る香によそふるよりは郭公聞かばや同じ声やまさると

(和泉式部日記、四三) [異] (声やしたると、[河] (声やたらん真本にたると、[五] (こゑやにたれと、[岷] (声やわたると

24 かぎりなくそこひしらぬころさしなれば (七六〇・四一三)

① そこひなき淵やは騒ぐ山川の浅き瀬にこそあだ波はたて (古今集卷十四、恋四、三三、題しらず 素性法師・古今六帖第

三淵、三三六、「おぼろげの〔初句〕…うは波はたて〔結句〕」・
素性法師集、一五二、「上波はたて」〔河〕〔岷〕〔湖〕〔新〕
〔事〕

② 限りなき名におふ藤の花なればそこひもしらぬ色の深さか
〔後撰集卷三、春下、二五、三月の下の十日計に三条の右大
臣兼輔の朝臣の家にまかり渡りて侍りけるに藤の花さける
遣水のほとりにてかれこれ大みきたうべけるついでに 三
条右大臣・兼輔集、一五三、京極家の藤の賀弥生晦にし給
ふに三条おとと、「色の深さよ」〔河〕、〔休〕限りなく…
花ならば…色のふかさに、〔紹〕限りなく…色のふかか
は、〔岷〕〔引〕

③ 玉藻かる蟹にはあらねど渡津海の底ひもしらず入る心かな
〔後撰集卷三、恋四、七六、身よりあまれる人を思ひかけて
つかはしける 紀友則〕〔河〕わたつみの〔真本わたつ海の〕、
〔岷〕〔余〕

25 うちとけてねもみぬものをわかくさのこゝろありがほにむすば
くららむ〔元九一〇・四一〕

① うちら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばんことをしぞ思ふ
〔伊勢物語、一〇六、古今六帖第六、春の草、三〇四、業平・新
干載集卷十一、恋一、一〇六〕〔河〕〔湖〕かくばかり、△花▽
〔休〕、〔孟〕かくばかり、〔岷〕〔事〕〔集〕

② つくま江におふるみくりの水草みまだねも見ぬに人のこひ
しき〔古今六帖第六、みくり、三〇七〕〔異〕

26 いろにみてたまひてのちはおほたのまつのとおもはせたるこ

となく〔〇〇一・四五〕

① こひわびぬ太田の松のおほかたは色に出でてや逢はむとい
はまし〔古今六帖拾遺、三三六、大成本朝恒集、三三〕〔釈
前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕△花▽〔二〕〔休〕〔紹〕〔孟〕
〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕、
△玉▽〔引歌こゝにかなはず〕

② 二葉より今は太田の松の葉のいくよか君を恋てへぬらむ
〔兼盛集、一七五、いひそめていと久しうなりにける人に〕
〔拾〕〔余〕

③ 忍おれど色に出にけりわが恋は物や思ふと人のとふまで
〔拾遺集卷十一、恋一、六三、天曆の御時の歌合 平兼盛・兼
盛集、一七〇、天徳四年内裏歌合、三三三、兼盛〕〔評〕〔集〕
27 おととの御ゆるしをみてこそかたよりほのきゝてまことのす
ぢをばしらず〔〇〇九・四五〕

秋の田の穂向きの寄れる片よりにわれは物思ふつれなきも
のを〔万葉集卷十、二四七〕〔拾〕〔余〕